
とある科学の風勢制御《ブラストマニューブ》

原石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の風勢制御
プラストマニユーフ

【Nコード】

N4605Z

【作者名】

原石

【あらすじ】

あのパリイな麦野姉さんにもし弟がいたら。そしてその弟が学園都市の第八位で、一歳年上の結標姐さんが幼馴染だったら。そんな特殊な環境で育った主人公が一生懸命生きていくお話です。話は中学二年生から始まります。

第0話 主人公紹介（前書き）

「主人公の能力がチートじゃない小説を書いてみたかった。それだけが望みで……俺はこの小説を書こうと決心したんです」

禁書目録を愛している男

原石

第0話 主人公紹介

むぎの
麦野 龍華 りゅうか

容姿：ほとんど跳ねが見られない男子にしては長めの茶髪。ツリ目のせいで目つきが悪いが、顔のつくりはかなりマトモ。若干、女顔。

< 高校一年生の段階の容姿 >

> i 3 7 3 3 5 — 3 4 1 6 <

身長：【第1章】 1 5 6 c m

【第2章以降】 1 6 5 c m

体重：【第1章】 4 9 k g

【第2章】 5 2 k g

性格：メンドクサガリ屋だが、人を放っておけないお人よし。あまり好戦的ではないが、キレると姉譲りの暴走っぷりを見せる。

能力：風勢制御<ブラストマニユーブ>

能力説明：風を掌握するチカラ。自分で風を発生させることも可能。体に風を纏って攻撃もできる。

学園都市の第八位。

顔が少し女顔のため、性別を時々間違われてしまうことを気にして

いる。

二歳年上の姉が一人いて、一歳年上の幼馴染が一人いる。

第0話 主人公紹介（後書き）

「遅刻遅刻遅刻う！！」

学園都市第八位

麦野龍華

第1話 家に帰るまでが遠足（前書き）

「貴方、そんなものばかり食べていたら早死にするわよ？」

学園都市の大能力者

結標淡希

第1話 家に帰るまでが遠足

『学園都市の能力開発技術は、向上の一途をたどっており、この調子で行けば、強能力者以上の能力者の数を増やすことも可能であると専門家は言い』

学園都市の第7学区にある2LDKのマンションの一室で、毎朝六時半から放送されている報道番組がそんなニュースを、淡々とした口調で視聴者に知らせている。無愛想な表情だが何故か人気がある女子アナウンサーの声だ。

そんなアナウンサーの顔をぼーっと見つめている少年こと、むぎの麦野龍華は実姉が毎朝用意してくれる「サクサクツ！チョコ風味メロンパン」をもぎゅもぎゅと食していく。

「ごちそうさん」

メロンパンを食べ終わった龍華は洗面所に移動して歯を磨き始める。低血圧な龍華の表情は、起床から三十分ほど経っている今でもぼーっとのペーっとしていた。

十分ほどかけて歯を磨いた後、学校指定の青いブレザーと黒いズボンをもそもそと着用していく。

そして制服を着終わって顔を水で洗ったことにより覚醒した龍華は薄っぺらい鞆を肩に担いで、

「行つてきまーす」

この俺、麦野龍華は学園都市の第八位の超能力者だ。能力名は「**風勢制御**」。
風という風を掌握する能力。それが俺に与えられたチカラだ。

俺が超能力者になったのはつい一か月ほど前のこと。第四位である姉に、猛特訓をさせられたことによる能力の急速な精度向上が理由だ。

この能力は別に珍しいものじゃない。level3やLEVEL2は多く存在しているし、俺の知り合いにもこの能力を持っている奴はいる。ただ、運が良かっただけ。

(ヤベエヤベエヤベエ！ このままじゃ遅刻するっ！？)

そんな第八位の俺だが、今の状況はすこぶる悪かった。絶体絶命のピンチだと言ってもいい。

なぜなら。

無遅刻無欠課無欠席の大記録に遅刻という名の脅威が迫っている
のだから！

(沈姉しづねえのわがままなんか無視して、早寝すりや良かつたんだあああああああああああああああああああああああ！！)

元々スタミナが少ないせいで肺が悲鳴を上げている。うえ……吐きそう。だけど諦めるわけにはいかない。ココで止まってしまったら今までの苦労が水の泡になってしまう！

コンクリートの地面を ダン！ と力強く蹴って速度をあげる。

（家から学校まではそう遠くねえ。この調子ならチャイムぎりぎりには辿りつけるはず……ッ！）

ほら見えてきた。無駄にきれいな白い校舎。無駄にデカくて無駄に生徒数が少ない俺の通っている中学校。校長先生が校門を閉めようとしているけどそうはさせねえ！！

パンパンの足にムチ打ってラストスパートに全てを賭ける。俺に不可能はない！俺は……第四位の弟であり、第八位の超能力者なのだから！

結局、チャイムにはギリギリ間に合った。息も絶え絶えで肩で息をしている俺を見て『だ、大丈夫か……麦野？』と担任が聞いてきたが、俺は満面の笑みで『問題ないっす！！』と答えておいた。人間、笑顔さえあればどんな状況でも乗り切れるもんだ。

んで、四時間目が終わって今は昼休み。俺は昼食を調達するために購買へと向かいますかね。今日はパンでも食うか？ いや待て。今日は水曜日だから鮭弁が安く売っているハズ……ッ！！

「そうと決まれば善は急げだな。鮭弁は誰にも渡さねえ！！」

ぐっふっふ。沈姉しずねえですら指をくわえて羨ましがるほどの鮭弁を独り占め……多分他の人も買ってるだろうけど、このクラスでは俺だけで鮭弁を独り占め！！ 神よありがとう！！

「待つてる俺の鮭弁たちよ……ぐふえ!!」

頭に走る強烈な痛み。というか痛みよりも先に疑問が俺を支配した。

教室を出ようとしてドアをガラガラツと開けて飛び出そうとしたら、いきなり眉間を鈍器で殴られた。視界にキラキラとした無数の星が見えるのは幻覚だろうか？

「あら？ 龍華じゃない。どうしたのかしら？」

「どうしたのかしら？ じゃねえ!! どう考えても確信犯だろお前!! 出会いがしらに軍用懐中電灯で殴りつけるのは確信犯だろオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

猛牛のような叫び声をあげる俺を冷めた目で見つめてくるこの女子生徒の名は結標淡希。むすじめあわき【座標移動ムーブポイント】という能力を持った大能力者だ。俺の幼馴染で沈姉と犬猿の仲であるヤツ。怒らせたら壁に体を埋め込まれちゃうゾ

そんな淡希にさらなる追撃をかまそうとしたが、俺は鮭弁を買いに行く途中なのだ。こんなところで足止めを食っている暇はない。

「つつーか、今はお前の相手をしてる場合じゃねえんだ!! いざ購買へ!!」

「あ!! ちよつ、待ちなさいったら!!」

「聞こえませーん!!」

淡希が能力を使う前に俺は購買へと猛ダッシュした。

購買で無事に鮭弁を購入した俺は満面の笑みを浮かべて教室へと帰還した。残り三十分ほどのこの休み時間、鮭弁の味を楽しむ時間に費やしてやる！

そんな決意を固めたところで、窓際の俺の席に淡希が座って『健康 爽快サラダ』という市販のサラダの詰め合わせをもぎゅもぎゅと頬張っているところを目撃。

俺はため息を一度ついて前の席に腰を下ろす。

「相変わらずサラダ一筋だなお前。そんなんじゃ早死にすつぞ」

「鮭弁オンリーな貴方にだけは言われたくないわね。野菜も少しは摂らないと」

「バー力。鮭は体にいいんだっつーの。よく言うだろ？ 『魚は頭に良い』って」

「すでにLEVEL5であるあなたにそのキャッチコピーは必要ないんじゃない？ 削板じゃあるまいし」

「軍覇は【原石】だから演算してねえんだ。頭が悪いのも頷ける。それに俺は第八位なんていう微妙な立ち位置に対して抗議したいぐらいだっつーの」

「そういうところ、沈利さんに似ているわよね。順位なんてどうでもいいでしょうに」

レタスをフォークでグサツ！と突き刺して口へと運ぶ。不覚にもその動きの流れが優雅だと思ってしまったのはココだけの秘密だ。

知られたらこいつは調子に乗る。間違いねえ。

「工業的価値に基づいての順位付けなんて納得できるかよ」

「でも貴方の能力って八人の超能力者の中で、一番地味じゃない」

「気にしてることをズバツと袈裟斬りにしますねアンタは！ もうちよつとオブラートに包むとかできねえの！？」

「ごちそうさま。じゃあ私は教室に戻るから」

「って話を聞けえ！！」

ヒュンツ！ と、淡希は自分自身をテレポートさせて教室へと戻っていった。ホントに便利だよな空間移動系の能力って……俺も使ってみたい。

「はあ……次の授業の準備でもしよ」

俺が溜め息を吐くのと五時間目開始のチャイムが鳴るのはほぼ同時だった。

全授業が終了し、帰宅部の学生にとっての楽園である放課後がやって来た。
バラダイス

俺は薄っぺらい鞆を持って教室を早足で出る。今日は早く帰って来いって沈姉に言われているからできるだけ早く帰らねえといけない。今は四時二十六分。指定された時間は五時。余裕で間に合う時間だ。少しぐらい寄り道しても文句は言われないだろう。

「コンビニにでも寄ってくかなー」

そうと決まれば何とやら。

俺はいつもの帰宅ルートから右に逸れて、地下街へと入っていく。この地下街は俺のお気に入り、よく沈姉と一緒に飯を食いに来ている。

俺はそこのあるコンビニを目指して大股で早歩き。

『あ。どこのバカが早歩きなんてしているのかと超思えば、龍華じゃないですか』

ココのコンビニには俺と沈姉お気に入り、の鮭弁が販売されている。この時間ならまだ余っているはずだし、アレを確保しておけば遅刻しても怒られないで済む。姉の機嫌取りぐらいお手の物なのだ！

『あれ？ 超シカトですか？ この私を超無視ですか？ そうですかマジですか……』

よし、見えてきたぞ例のコンビニ。今日は珍しく人が少ないみてえだな。とりあえず鮭弁を確保して、マンガを一話だけ立ち読みして、それからそれから……予定がどんどん広がっていく！

『もう私超キレましたよ。プツンしましたよ。第八位だとかそんなことは超どオでもいいです。くらえ！ 絹旗ちゃん室素パーンチッ！――』

「げぶるわあ――！」

右頬にいきなり痛みが走ったかと思ったら地下街の壁に猛烈に熱

いキス。一瞬で視界がブラックアウトし、右腕の関節がぎしぎしと痛みを発している。誰かが俺にサブミッションを決めているようだ。

「って何すんだ怪力小学生！！」

俺にサブミッションをかけているこの少女の名は絹旗最愛。きぬはたさいあい【室オフエンスアーマ素装甲】という変わった能力を持った大能力者だ。沈姉の知り合いみたいなんだけど、どんな関係で知り合ったかは知らない。

そんな絹旗は額にビキリと青筋を浮かべ、目以外をにこやかにしながら、

「それは超こっちのセリフです！！ 何回声かけたと思ってるんですか！！？」

「折れる折れる折れるって！！ 大能力者の能力フルパワーで人の腕を折ろうとするんじゃないやありません！！ 能力を使う時に大事なことはTPO！！」

「それを超見事に今の状況は当てはまってますが。とりあえず今は私の怒りを体で超感じてください。大丈夫です。痛みの後は快樂が超待ってますから」

「死！？ それは決して体験してはいけない領域じゃね！？ つつーか早く家に帰らねえと沈姉にキレられんだよ！！ 責任とれんのか！？」

「それじゃあ尚更家には帰しません。ここで超愉快的死体になりやがれ！！」

ヤベエ。コイツ目がマジだ。俗にいうレイプ目という奴じゃなからうか。ホントに小学生かコイツ？ 凶悪さがすでにヤバ目なライオンなんですけど。

「愉快的死体になりたい人間はこの世にいなえ！！ 秘技！！」

第1話 家に帰るまでが遠足（後書き）

「貴方の精神、操っちゃうゾ」
「

学園都市の超能力者

食蜂操祈

第2話 女の中に男が一人（前書き）

「そんなのはあ、私の包容力でなんとかなっちゃうってゆーかあ」

常盤台中学一年生の超能力者

食蜂操祈

第2話 女の中に男が一人

「龍華あー。ちょっと学び舎の園でチョコケーキを十個ほど買ってきてくれない？」

とある休日。毎週のトレーニングとしてジョギングをしている俺は、いつも通りにジャージに着替えて靴を履こうとしたまさにその時、沈姉にそんなことを言われた。

「え」

「オイなんだその反応。まさか私の頼みを聞けないってのかにやーん？」

沈姉が『にやーん？』って語尾に付けるときは決まってお仕置きが付属されている。ここで逆らうと五話ぐらい出番なしとか普通になり得る。それが存在すら抹消されるとか。おお。学園都市の第四位の一六歳は怖ろしいね。俺も同じレベル5のはずなのに勝てる気が全くしねえもん。

いや確かに俺と沈姉の能力の珍しさは圧倒的に沈姉の勝利だ。原子を崩す能力と風を発生させる能力。攻撃力だって沈姉の方が圧倒的。

だけど俺の能力の方が応用性はあるんだって！！ だからきつとこの能力を完ぺきに使いこなせれば沈姉に勝つことも夢ではないハズ！！

とそんなことを思っているが、口には出さない。命は大切にしないと。

「でもあそこは男子禁制じゃなかったっけ？」

学び舎の園は5つのお嬢様学校が管理しているエリアだ。俺たちの家がある第7学区にあるから沈姉がよく買い物に行ったりはしているらしいけど、俺は一度も行ったことが無い。だって男だからな。

「そうだったそうだった。そんな龍華に私からのプレゼントー
これでお前も立派な女の子だゾ」
「げ」

そう言っただけ沈姉が取り出したのは（どこで手に入れたのかも聞きたくない）セーラー服だった。しかもスカートがイジメと言えるぐらいに短い。太ももがバツチリ出ちまうぐらいには短い。

まさかね。まさか……

「これを俺にどうしろと？」

「これを着て学び舎の園に入っちゃいなさい」

俺は姉のパシリで男としての尊厳を捨てなければならないというのだろうか。

「断固拒否する！！　ただでさえ女顔で小柄な俺なのに、女装なんてしてしまったら完璧に女として見られちまうって！！　あそこには食蜂とかいろいろいるんだぞ！？」

「ああ！？　私のケーキとお前の尊厳。どっちの方が大切なんだ？　お前なら言わなくても分かるよなあ？」

ハッ。そんなの決まってる。

「沈姉の……………ケーキです（うるっ）」

「ハア……足がスースーする……パッドが入ったブラジャーが邪魔くさい。っつーか何で俺の体ってこんなに女らしいんだ？ もっと筋肉とつかねえのかな……？」

無事に（？）学び舎の園へ侵入した俺は顔を真っ赤に染めながら、目的のケーキ屋を目指して歩いていた。周りにいる常盤台中学の生徒とか霧が丘女学院の生徒とかが俺をちらちら見ているのは気のせいだと思いたい。

「（なにあの人。かなり可愛くない！？）」

「（あの制服って見たことないな……。どこの生徒だろ？）」

「（ウブそうな子だねー）」

「けどなんか目つき悪くない？ 射殺されそう……」

気のせいだと………思いたいんだッ………

「分かった。ジョギングのせいで足がすらつとしてるのが問題なんだ。もっとハードなトレーニングをすれば筋肉が付くはず。こんど本屋で筋力アップの本でも買ってくるか……」

俺だって男らしい体つきが良いんだよ。ただでさえ女顔なのに華奢な体って……この体のせいでよく女だと間違われるし沈姉には昔から着せ替え人形みたいな扱いをされるし……俺って全く自慢でき

る人生じゃないな！！

そんな自虐的な気分には埋め尽くされまいと俺は決意して、早足でケーキ屋へと急ぐ。短すぎるスカートが捲れている気がしないでもないが、そんなことより今はケーキだ。できるだけ迅速に買い物を済ませればぎりぎりセーフのハズ。

実はさっきから自分に追い風を向けて速度を上げちゃったりしてる。こんな地味な能力でも、一応超能力者なんです。

「お？ よしよし、見つけたぞ俺の目的地！！ 目指せケーキ屋、急げマイハウスへ！！」

カランコロンカランという何ともポピュラーな音を鳴らしながら、俺はケーキ屋の扉を開けた。甘いクリームや果物の香ばしい香りが俺の嗅覚を刺激する。

ヤベ……涎垂れそう。

しかしそこで、俺は人生史上トップを張れるぐらいの危機に直面する。

『じゃあ、ねえー……イチゴショートを3つとチョコフォンデュを2つ貰っちゃおっかなあ』

俺の目の前でロングの金髪で無駄に胸がデカく、名門常盤台中学の制服を着た少女がケーキを大量に購入していたんだ。

ケーキを買っていることだけなら問題はない。けど……この少女の顔にかなり見覚えがあるのは気のせいだろうか？

『フォークはお付けいたしますか？ 食蜂様』

『いるいるいりまーす！！ それと、やっぱりモンブランも欲しい

！ 一つ追加ねー」

『フツ。相変わらず甘いものが大好きですね』

『そうなんだよねえ。私は甘いものが無いと死んじゃうのぉ』

間違いない。この常盤台の少女は間違いなく俺の知り合いの中学一年生だ。嫌だなあ。心理系の超能力者が目の前にいるのって嫌だなー。

早く出てってくれないかなー、と一心不乱に念じていると、目の前にいる食蜂操祈がぐるん！と俺の方を振り返った。

「！？」

「あつれえ？ おかしいなあ。今、龍華の心の声が聞こえたんだけどおー……気のせいだったみたい」

そう言って再びレジの方を向く食蜂。

た、助かったー……こんなところでこんな姿を見られたら人生が破滅するところだったぜい……

『ありがとうございます。次の方どうぞ』

「あ。はい！」

食蜂がケーキを買い終わったところでついにやって来た俺の順番。そんなに待つことが無くてよかったな。俺ってばあんまり待つのが好きじゃねーんだよねー。長い長い方じゃねーし。

「えつとー……チョコケーキを十個とー……メロンケーキを二つくださいな」

……俺がこんな女言葉っぽくなっているのには理由があるのだが、

話す時間をたくさん費やすことになるし俺が話したくないためコ
コでは割愛させてもらうことにしよう。

「はい。それではお会計一万五千円となります」

「いつ!？」

「ど、どうされました？」

「な、なんでもないです。一万五千円ですね。えっと……二万円か
らでいいですか？」

「大丈夫ですよ」

さつき言葉に詰まってしまったのはこのケーキ屋のある意味破格
な値段を目の前にしたからだ。ケーキ12個で一万五千円って……
そこらへんの携帯ゲーム機一台分って……学び舎の園のケーキ屋の
値段はバケモノか!？

いや、まあ。それぐらい美味いってことなんだろうーけどさー……
なんだろう。この胸に突き刺さる理不尽な気持ち。これは一体ど
こにぶつければいいんだろうか。

「五千円のお返しです。ありがとうございました」

よし。ブツは確保した。後は即効で家に帰るだけだ。どうせ沈姉^{しずねえ}
はどっかに出かけてるだろうし、このケーキを冷蔵庫に保管してお
けば何の問題もないハズ。

ってゆーか今日の晩飯とかも考えとかなきゃなー………近くのファ
ミレスでいいや。どうせ沈姉がそこに行くとか言い出すんだろうし。

ケーキを落とさないように気を付けて持ちながら、俺は店の外へ
と出た。

「待ってたよお。龍華」

「……………」

詰んだ。俺の人生が意味不明なタイミングで詰んだ。

「しよ、食蜂！？ な、なんでまだそこにいるんだ！？」

「心理系能力のスペシャリストである私の目をごまかそうなんて無理っしよ。なんてったって私は学園都市・常盤台中学の女王である第五位の【心理掌握】メンタルアウツなのよ？ 龍華ったらそんなことも忘れちゃった感じいい？」

「相変わらず中学一年生に見えないような外見と喋りカタしますねお前は」

「それは褒め言葉として受け取ってあげるう」

俺と同じぐらいの身長の子供中学生が目の前にいるという事実に絶望した方が良いのだろうか？ 小柄な俺と長身の食蜂。超能力者はみんな特徴があるんですねー。……………はあ。

「で。何の用だ。俺は早くここから帰りたいんだよ」

「あらあ？ そんな話し方をしてもいいのかしらあ？ ばれちゃうんじゃないのあ？ 女装してるこ・と・があ」

「ぐっ……………」

「ほらほらばらしてほしくなかったら私の買い物に付き合いなさい。龍華ちゃん」

「誰が龍華ちゃんだ！！ つっ！ か、俺は早く家に帰らねーといけねーってさっきから何度も」

「ば・ら・す・わ・よあ？」

「……………い、行きましょーか、しよ、食蜂さん」

「そうねえ。じゃ、とりあえず下着でも買いに来ましょー。龍華ちゃん」

「い、いやあ」

「!!」

「これなんてどお？」

「いいと思います」

「貴方は壁を見ながら人の下着を選ぶのお？」
「ぐっ」

無理やり女性用下着売り場に連れてこられた俺は、店の中の壁とにらめっこして難を逃れていたのだが、策略家の食蜂に簡単に破られた。

一度溜め息を吐いて食蜂の方を振り返ったのだが、かなりきわどい下着の数々が視界に入って再び壁とのにらめっこを再開する。

「お願いします食蜂さん。マジで家に帰してください。姉がキレてと思うんです。もしかしたら死ぬかもしれないんですよ!!」

「イヤ」

「ちくしょうそんな返しだと思ったよ!! でもでも、こればかりは譲れない!!」

沈姉の怒りを真正面から受け止められるほど俺は大きな男じゃない。下手すりゃ死ぬ。下手しなくても死ぬ。あの姉を怒らせるイコール死ぬことなんだ!!

俺のそんな気持ちを遂に悟ってくれたのか、食蜂は顎に手を当ててしばし考え込むと、

「じゃあ私に似合うと思う下着をこの二つから選んでくれたら家に帰してあげるう」

「げ。何でそんなに際どいのが二つ……」

はつきりと言おう。食蜂が手にしているのは『ひも』と『スケスケ』だ。もう勝手に選んでくれたらいいのに。何で俺をこんなことに巻き込むのかな……

「じゃ、じゃあ………紐の方で」

別に欲望に負けたわけじゃない。これは男としての性がだな

結局、食蜂は俺が選んだ下着を購入した。その後、鼻歌交じりで『今度も一緒に買い物に行ってチョーダイな』と俺に無理やり約束させて食蜂は寮へと戻っていったんだ。

「龍華。なんでケーキを買っただけで五時間もかかったのかにやーん？」

「し、沈姉……これにはかなり深い事情が」

「それはその紙袋から覗いてる見覚えのない女性用下着が関係して

「るのか？」

「へ？………つてなんじゃこりやあ！？」 ま、まさか食蜂の仕業じゃ」

「龍華あ？」

「は、はいなんです。うか沈姉。できればお置きだけは勘弁して欲しいなあ……」

「無理」

「チクシヨーやっぱりこうなっちまうのかアアアああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああ
 あ！！！」

とりあえず三日間ぐらい入院することになりました。

第2話 女の中に男が一人（後書き）

「根性って言うのはなあ、絶対に裏切らねーんだ!!」

世界最高の原石である超能力者

削板軍霸

第3話 見舞客には気を付けろ（前書き）

「俺に常識は通用しねえんだよ」

学園都市の超能力者の少年

垣根帝督

第3話 見舞客には気を付ける

「ハア……暇だなー……」

先日のケーキ屋騒動（おもに沈姉が原因）のせいで三日間病院に入院することになってしまった俺こと麦野龍華。明日退院することができただけ、流石に誰もいない病室で一人過ごすのは退屈だ。誰かお見舞いにでも来てくれないかなー……

「（ガラツ） 龍華あー！ 美琴さんがお見舞いに来たわよー！」
「ん？ おお、御坂か。サンキューな」

今日の一人目の見舞客は現段階で大能力者の御坂美琴。みさかみこと何故現段階と俺が言っているかとゆーと、こいつが三年足らずで低能力者から大能力者までレベルアップしたからだ。来年年常盤台中学に入学するそーだけど、おそらくコイツと食蜂で超能力者コンビでも張るんだろーなあ……ってゆーか今の第三位の席次が空白だからコイツには頑張ってもらいたい。

俺がそんな考え事していると、御坂がじーっと俺の顔を見ていることに気づいた。

な、何のようだろーか。

「な、なに？ 俺の顔に何かついてるか？」

「んー？ 相変わらず女の子みたいな顔してるねーって思っただけ」
「シバくぞ小六」

「そんな顔で言われても怖くないもんねー。っていうかアンタって私と二歳しか変わらないじゃない！ やーい、やーい、女の子あー」
「なんて斬新な悪口！！ そして的確に俺の心を袈裟切りにしやが

った！！　こ、これが御坂美琴の本当のチカラだともいうのか！
？」

「フッフッフ。私の口から吐き出される言葉は的確かつ鋭利にアンタのハートをえぐってしまうのよ！！」

「最低だ！！　この小学生は一体何を学んできたんだ！？　やはり未来の超能力者だから性格が破綻してるのかな！？」

まあ、そんなでも見舞客が来たのは俺としては嬉しいことで、沈姉が病室に置いていったミカン^{ミカン}を御坂に二個ほどあげた。やっぱりコイツは子供みたいで、満面の笑みを浮かべてミカンをもぎゅもぎゅ食べ始めた。

そして、御坂がミカンを全部食べ終わったと同時に病室の扉がガラツ　と開かれた。

「よオ、龍華。また病院送りにされたってなア。^{一方通行様が見舞}
いに来てやったぜエ」

「ははは……サンキュー」

病室に入ってきた俺と同年の少年の外見は他とは一風変わっていた。

真っ白な白髪に透き通るような白さのアルビノ肌。獣を彷彿とさせる真っ赤な瞳を持った目。

コイツの名は一方通行^{一方通行}。この学園都市の最強の超能力者である第一位だ。所有している能力の名前は【一方通行^{一方通行}】。本名は不明でみんなが能力名でコイツのことを呼んでいる。

そんな一方通行はズカズカと病室に入ってきて、御坂の隣にパイプイスを運んで　ドカツ！　と腰を下ろした。

「ン？ オマエも来てたのか。クソガキ」

「く、クソガキじゃないもん！！ 私には御坂美琴っていう立派な名前があるの！！」

「まア確かに、他のヤツらには見られねエ名前ではあるわな」

「そ、そう？」

「俺はその名前嫌いじゃねエよ」

「ひやう！？（ボンツ）／／／／ えへへー」

アクセラレータ

一方通行の褒め言葉に顔を真っ赤にして頬を両手で抑えて頭を振る御坂。

アクセラレータ

俺はそんな御坂から視線を一方通行に移動させ、ため息を一度ついでから、

「このロリコン」

「愉快的死体になりてエみたいだなオマエ」

「だって今のはどう見てもロリコンだろ！！ 小学生の幼気な少女を弄びやがって！！」

いたいけ

「弄んでねエ！！ 勝手に変な解釈してンじゃねエよ！！ マジで潰すぞオマエ！！」

アクセラレータ

「ま、まーまーまー。落ち着きなさいって一方通行。ココは病院なんだから」

俺に今にも最強の能力をフルパワーで使わんとする一方通行を後ろから羽交い絞めにして抑え込む御坂。一方通行が華奢な体つきだからこそこできる技だ。

アクセラレータ

因みに、一方通行は常にベクトル操作の能力で自分の周りに反射の壁を発生させている。その壁に触れた者のベクトルは自分に反射して触れた者自身が自滅するというものだ。

アクセラレータ

けど御坂はいつも一方通行に抱き着いたり攻撃したりできてるんだよなあ……え？ そうですかギャグ補正ってやつですか。それ

なら納得がいきますねハイ。

「チッ」

「…………… 幼女に抑え込まれる中学二年生マジワロステラワロス」

「…………… 血流操作ア！！」

「うお！？ 危ねえ！！」

アクセラレータ

一方通行の悪魔の両手を何とか回避に成功。俺の命は何とか守り
きることができた。

「いきなり何しやがる！？ 今のは当たってたら死んでたぞ！？」

「チッ、殺す気だったんだけどなア。ちょこまかちょこまか逃げ回
りやがって。オマエは女か猿か何かですかア？」

「…………… (ブチッ)」

俺の何かがキレル音がした。

アクセラレータ

一方通行が龍華に禁断の言葉をぶつけた途端、龍華の眼から光が
すーっと消えたように見えた。

あれ？ この流れてヤバい流れなんじゃ…………

「一方通行クウウウン？ お前は俺を本気で怒らせてしまったみ
てえだにゃーん？」

「ケッ。男が猫言葉で喋んな気持ち悪い。女かオマエは」

「また女って言いやがったなコンチクショウ！！　もおキレたブチ切れた！！　お前はココでブチコロシ確定だ！！」

「上等オだ最下位！！　第一位様の実力で一瞬で床との熱いキスをプレゼントしてヤンよォ！！」

あわわわわわわわー！！　ヤバイってマズイって！！　こんな時にあのメルヘンさんは一体何をやってるの！？　このままじゃ病院が全壊しちゃうよー！！

「「死ねやア！！」

アクセラレータ

一方通行が椅子を龍華に向かって蹴り飛ばし、龍華が切れ味の半端ない風を右手の周りにスパイラルさせて一方通行を殴り飛ば

アクセラレータ

そうとしたとき、

「ここは常識が通じる場だ！！」

「「げぼっ！？」

ゴイイイイン！！　と、茶髪と白髪にコブシが振り落とされたの。いくらギャグ補正とはいえ、能力使用中の一方通行の頭にゲンコツを決められる人を私は一人しか知らない。

アクセラレータ

「た、助かったわ！！　てーとくお兄ちゃん！！」

「よお、御坂。相変わらず巻き込まれてんなあ。大丈夫だったか？」

かきねていしく

このお兄ちゃんの名前は垣根帝督。この学園都市で二番目に強い超能力者なの。所有している能力の名前は確か……そうそう【未^ダ元物質^{イクマター}】。この世界に存在しない物質を生成する能力だったハズ！！

ふふん。私だってLEVEL5を目指してるんだからこれぐらい

ちよろいもんよ!!

「な、なにすんだよ帝督!! 俺はケガ人だぞ!？」

「そのケガ人が第一位を殴り飛ばそうとしたのは気のせいかな？」

「コラテメクソメルヘン野郎!! 未知のベクトル作り出すのは卑怯だろオが!!」

「それでもしねえと殴れねえだろうが。ってかお前らココは病室だぜ? 静かにしねえか」

「「うつ」」

てーとお兄ちゃんの言うとおり。ココは病院なんだから暴れるのはメツよ。

そんなてーとお兄ちゃんの言葉にしゅんとしてしまふ龍華と一方通行。この2人って中学生なのに精神は子供なのよね^ア。

「まあとりあえず龍華、土産だ。駅前的高级鮭弁(一個当たり二千円)」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!
! マジで!?! ありがとうな!!」

「うつ……え、笑顔をこっちに向けんな。俺はノーマルだノーマルのはずなんだ……」

……まあ確かに、龍華の満面の笑みを向けられてドキッとし
ない男の人は見たことないかもね。姉があんなキャラなのにどうして龍華はこうなのかしら? 遺伝子の神秘ね……

「ん? どうしたんだ『元気してるか龍華ーっ!! 根性見せろっ!!』よ帝督って……軍覇……ココは病院だから静かにな……」

「「お前が言うな」」

バーンっ！ と扉を開け放って入って来たのは白い鉢巻を巻いた青いブレザーのお兄ちゃん。あのブレザーは確か、龍華と同じ中学校の【鳴神中学】^{なるかみ}の制服だったハズ。

んで、この人は龍華の一つ上順位の超能力者、つまり第七位のLEVEL5なの。

「まあまあそんな小さいことは気にすんな！！　いま大事なのはお前が元気かどうかっていうことだ！！　一か月後の大覇星祭の優勝へ向けての特訓もしたいからな！！」

今の言葉は空耳だと思いたい。

「あ、あのー……軍覇？　特訓って……何？」

「自分の限界を引き出すための修行のことだ！」

「いやそうじゃなくってさ……何で特訓？」

「オレが大覇星祭で優勝したいって思ってるからだが？」

「はいそこお！！　そこがそもそもおかしいんだっての！！　俺たち二人が修業したところで結果は変わらないのだよ！！」

「！？」

「今気づいたみたいな表情すんな！！　当たり前だろうが！！　いくらあそこが高位能力者が多い学校だって言ってもほとんどが消極的な能力ばっかなんだぞ！？　精神系とか補助系とか物質変化形とかなー！！」

「だ、大丈夫！！　根性が全てを補うはずだ！！」

「それはテメエのふざけた能力にしか適用されねえんだよおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

龍華の叫び声が病院中に響き渡り、私たちは看護婦さんから嚴重

注意を受けちゃった。

とりあえず一日残っているにもかかわらず無理やり退院させられた俺。今は家に帰って沈姉しずねえと一緒に夕飯を食べている。今晚のメニューは鮭の塩焼きだ。相変わらずの鮭メニューですけど何か？

「なあ沈姉。沈姉は今年の大覇星祭に出場すんの？」

「出ない。興味ないし」

「またかよ……相変わらずそういうお祭りごと嫌いだよな、沈姉は」
「別にいいだろ。私はあまり目立つことが好きじゃないのよ。裏方が良いトコね」

「その割には順位付けには厳しいよな」

「当たり前だ。私は一番以外は認めたくないからね。ったく、何でこんな微妙な順位なんだか……」

「俺は最下位だぞ？ まあ珍しくない能力だからしょうがないけどさー。工業的価値で言ったら俺の能力はブッチギリで一位だと思うんだけど……」

風力発電とかあるじゃん？ だから俺は発電に役立つと思うんだよね。自分でしたいとか思わないけど。

そんな俺の言葉に沈姉は はあ と溜め息を吐くと、

「風力発電の発電量は微小だろうが」

「あ」

かなり単純な理由で俺の能力は最下位決定だった。はあ……不幸だ。

第3話 見舞客には気を付ける（後書き）

「私は絶対に超能力者になってやるのよ!!」
胸張って歩けるように
そしてアイツの隣を

学園都市最強に恋する大能力者の少女

御坂美琴

第4話 バイト中に会おう知り合いほどウザい奴はいない（前書き）

「お帰り下さいませ、お客様」

学園都市の超能力者の少年

麦野龍華

第4話 バイト中に出会う知り合いほどウザい奴はいない

そろそろ秋も始まりそうだなーという季節である日。俺は2LDKの自宅のリビングで沈姉しずねえに向かって土下座をしていた。そんな俺をかな〜り見下したような視線で見下ろす沈姉。

何で俺がこんなことをしているか。それは麦野家のお金管理に問題があるからだ。

俺と沈姉はLEVEL5だからかなり高額のお金を学園都市から貰っている。だから普通は買物などで金が足りないなどということとは起きないんだ。

でも、麦野家のお金は全て沈姉が管理してる。月に俺が渡される小遣いの金額は三千元。そこら辺の無能力者以下の金額だ。

俺の友人にはやけに高位能力者が多い。月に三千元でそんな奴らと交際していけるか。

「頼む沈姉！！ 小遣い制を廃止して、俺の金は俺で管理させてくれ！！」

「イヤ」

「そんなぁ！？ 何でさ！？」

「お前が管理すると散財するだろ。ゲームとか遊びとかそんなので」
「うっ」

「それに思春期の男は野獣だからな。コンビニでエロ本とかにでも使うんじゃないかにやーん？」

「エロ本なんか買ったことねえだろ！？」

「とにかく小遣い制は廃止しないわ。お金が欲しかったらバイトでもすればいいんじゃないの？」

「う、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！
！ 沈姉の牛乳女アアアぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ

あああああああ！！！！」

『なっ！？ バカなことやってんじゃないわよ！！』という叫びを背中に受けながら、俺はケータイと財布を持って家を飛び出した。

家を飛び出して学園都市の第7学区を走ること数分。俺は商店街をぼーっと歩いていたら。ふらふらと歩いているせいかもしれないが、周りの人が俺を怪しい奴を見るかのごとき視線で見てくる。

とりあえずバイトしよう。それでお金を稼げれば上々だ。

何で俺がお金を必要としているのか。その理由は二日前にさかのぼる。

夏休みも終盤に差し掛かってきたので派手に遊ぼうと俺と淡希と軍覇と御坂でカラオケに行ったんだ。それで五時間ぐらい本気で歌って家に帰っている途中に通りがかったアクセサリーショップの前で、

『ん？ 何見てんだ淡希？』

淡希がいないな、と気づいた俺が後ろを振り返ると、例のアクセサリーショップのガラスにびたーっと淡希が張り付いているのを発見したんだ。普段から冷静なコイツにしては珍しいことにな。

それであまりにも見ない光景だったのでそう声をかけたんだけど

……

『べ、別に何も見てはいないわ。行きましょう』

『いやどう考えてもそのガラスの中凝視してただろ。何が売ってるんだ？』

『何もないわ。早く帰りましょう。日が暮れてしまうわ』

『なんだよ……見せてくれてもいいじゃねーか』

『えいつー！』

『おいちよっ（ひゅんっ）』

ということがあったわけだ。

因みに淡希が凝視していた物を機能確認したところ、透き通った赤色のペアの腕輪だった。一体誰とのペアが良いのかは知らないけど、誕生日も近かったはずだし買ってやるーかなーって思ったワケ。しかしそこで大きな問題が浮上した。俺はこのペアの腕輪を買えるほどお金を持っていなかったんだ。それでさっき沈姉にあんなことを言っていたわけなんだけど……見事に玉砕しましたよ。

「はあ……どつかに高額なバイトとかねーかなー」

自分でも思う。労働者をかなり嘗めた言葉だったことぐらい。でも今は本気でお金が必要だ。

「まあとにかく、目に入った喫茶店でバイトでもしよう。本気で働けば誕生日には間に合うはず」

そうと決まれば善は急げ。俺はちょうど目に入った人気の喫茶店へと脚を進めていったんだ。

『採用。ってユーが君がココで働いてくれると知名度がさらに上がるからずっと働いてほしいぐらいなんだけどね』

バイトしたいですって言った瞬間にこの言葉。かなり嬉しかったけどこれって能力者びいきなんじゃねの？と店長に言ったんだけど『LEVEL5は別格だからね』と言われてしまった。

そんなこんなで俺のバイト生活が遂に開幕。執事服のようなコスチュームを身に纏ってやる気を出す。仕事は主に接客だ。レジ打ちは他のバイトの奴がやるらしい。俺はとにかくお客様に笑顔を見せて注文を聞くだけでいい。簡単なミッションだ。

カランコロンカラン

お。早速客が来たな。

「いらっしやいませー！ 何名様でお越しで……しょう……か？」

途中までは完璧に接客できていたはず。なのになんで尻すぼみになってしまったか。それはまさかの予想外な客がやって来たからだ。やって来たお客様の人数は四人。

一人はチンピラのような恰好をした茶髪の少年。

一人は真っ白な髪と肌で真紅の瞳を持った少年。

一人は常盤台中学の制服を纏っている金髪で巨乳の少女。

一人は子ども服を身に纏って白い髪の少年の腕に抱き着いている少女。

断言しよう。

俺はこいつらを知っている。

「.....お帰り下さいませお客様。出口は
あちらでございます」

「.....入店拒否!?!?!」

とりあえず^{アクセラレータ}一方通行と帝督と食蜂と御坂の四人を席に案内した。
あまり目立ってほしくないのもので店の隅っこの方だ。ココでは俺が
ル。異論は認めない。

「ねえねえ店員さあん。注文いかしらあ?」

「一番高額なもの以外は承っております」

「じゃあその一番高いやつでお願い」

「はいかしこまりました。それではご注文を繰り返させていただきます
ます。『二か月前の牛乳と賞味期限切れのココアの素』を四つでよ
ろしいですね?」

「よくねえよ!!! なんだその意味不明な商品は!? 絶対えにお
前が今考えたモンだろうが!!!」

「あ。すいませーん。メルヘン様はCセットの方がよろしかったで
すか?」

「はあ? なんだよCセットって」

俺の言った言葉に疑問符を浮かべて興味を向ける帝督。他の三人も分らないように、首を？と傾げている。では教えてやろう。Cセットの正体を……

「Childセットとなっております。具体的な料理は『国旗の刺さったチャーハン』『お子様ゼリー』『可愛い天使が描かれたパックのミルク』です」

「お前マジでケンカ売ってんだろ！？ はっきり言えよ！！」

「売ってますけど何か？」

「ぶっ潰す！！ こんな店ぶっ潰す！！」

流石に超能力者が暴れると店側にかなりの損害が出てしまうので食蜂の精神操作でなんとか帝督を抑え込むことに成功した。危ねえ危ねえ。俺の能力なんかじゃ抑えきれねえもんな。

で、結局一番高額なチョコレートパフェを四人分オーダーしてコイツらに運んだんだ。ポリウムもすごいが値段もすごい。詳しい値段は言えないが、まあ家庭用ゲーム機一台分ぐらいとも思ってくれ。

「美味しいわあ。これなら何個でもいけちゃう感じい？ 私の包容力で何とでもなるわけだし」

優雅にパフェを口に運んで食している食蜂が目キラキラさせながらパクついている。

いや、包容力に関係ねえだろ……

「うえ。美味えけど甘ったりい……オイ龍華。コーヒー頼むわ」
「かしこまりました」

まあ、一応バイトなワケだし仕事は真面目にしないとね。今一瞬

だけイラツと来たのは気のせいだ。俺の胸の奥にしまっておこう。
平和が一番だって。

「あ、一方通行！」
アクセラレータ

「ンア？ どオしたクソガキ？」

「はい。あ、あーん／＼」

「ン？ あーん。……おっ？ 意外にいけるなアこのパフェ」

「ぜ、全然意識されなかった……（がくっ）」

一方通行が甘いもの好きだとは知らなかったな。そして御坂、頑
張れ。
アクセラレータ

そんな感じで一時間が過ぎたとき、一方通行たち四人が席を立つ
た。どうやら家に帰るようだ。ふう……やっこの緊張感から抜け
出せる……

「ではお会計200400円になります」

「……今更なだけだよ。流石にその値段はぼったくりじゃね？」

「うるさいパシリ。さっさと四人分支払って失せる」

「わーったよ！！ 帰りやいいんだろぅが帰りや！！」

「ありがとうございましたー」

大粒の涙を滝のように流しながら去っていった。アイツは純情だ
からイジリがいがあるなあ……あんなんでも学園都市の第二位なん
だから世界はおかしいとは思っけど。

そして今日の仕事が終了した。明日もガンバローと気合を入れて
店を出ようとしたら、店長に肩をツンツンと触られた。はて、何だ
ろっか？

「なんですか？」

「今日のお給料だよ」

「はぁ。ってええっ！？ これは流石に多すぎじゃないスカ!？」

「話はさっきの金髪の子から聞いたよ。なんでも幼馴染にプレゼントを贈りたいらしいじゃないか」

「うっ……あの野郎お……」

今度会ったらマジで潰す。商店街のと真ん中で突風吹かせてスカ
ート飛ばす。絶対だ。

「ははははは。別に恥ずかしがらなくていいじゃないか。大切な人
なんだろう？」

「そ、それはそうなんスけどね……あっちがどう思ってるかは知ら
ねえっスけど……」

「相手の気持ちなんかより大切なのは自分の気持ちなんじゃないか
？ 自分が好きだから大切にするし喜ばせたいって思う。それじゃ
ダメかな？」

微妙にしわのある顔に浮かぶ笑顔が妙に納得感を生み出していた。
い、いい人だよこのおじさん……

「そう……ッスね。ありがとうございます!! そんで、これから
よろしく願いしますッ」

俺は笑顔の店長に見送られ、例のアクセサリーショップにダッシ
ュで向かった。

とある座標移動の誕生日、鳴神中学にて。

「おーい、淡希ー！」

受験を控えた鳴神中学三年生である【↑ポイント座標移動】の結標淡希が校門をくぐって家に帰ろうとしたとき、結標の幼馴染であるLEEVE L5で【風勢制御】の麦野龍華がトタタタと走ってやって来た。何故か顔を真っ赤に染めている麦野を見て結標が頭に疑問符を浮かべていると、

「今日、お前の誕生日だったろ。だからその……これー！」

そういつて麦野が結標に手渡したのは、赤いプレゼントボックスだった。重さはそんなにない。ということは小物系かしら？と自分で予測してみるが中身を見ないと確定はしない。

「覚えてくれてたの？」

「あ、当たり前だろ。そ、その……た、誕生日おめでとう／＼／＼」
「フフツ。相変わらず子供ね。普通にプレゼントも渡せないのかしら」

「う、うるせえー！」

流石に幼馴染と言っても1歳年の差がある二人には余裕の度合いが違う。

まあ、平気そうにしている結標の心臓も鼓動の速度は過去最高と言っても過言ではないほどのだが。

「開けてもいいかしら」
「どうぞご勝手に!!」

プレゼントボックスの紐を解こうとしたまさにその時、結標は麦野の右腕に見覚えのある赤い腕輪が付けられていることに気づいた。透き通った赤色の腕輪。

まさかね、と思って紐を解く。

そこには赤く透き通った腕輪が入っていた。

「え……………」

予想もしなかったプレゼントに思わずそんな間の抜けた声が出てしまう。

「そ、その、さ。お前がこの前見てた店に行ってみたんだよ。で。そこにこの腕輪が売ってたから……………」

耳の先まで真っ赤に染めて言葉が尻すばみになる麦野を見て、思わず結標は頬を赤く染めてしまうが態度には出さない。クールキアラはクールを保つことが大切なのだ。

「で。しれつと片方は自分のものにしてるってわけね」

「!?!? こ、こここここここここれはそのあれだ!! その、えつと……………」

良い言い訳が思いつかずにあわわわーっ!と喚き散らす麦野に思わず笑みがこぼれる。

すると結標は静かに一歩ほど麦野の方に歩み寄って、

フッ

麦野の唇に自分の唇をそつと数秒間だけ触れさせた。

[illegible]

お前がどういふことだよ、とツツコミを入れたくなる行動をとっている麦野。

そんな混乱中の麦野を、頬を赤く染めた結標は大人の微笑を浮かべて、

「好きだってことよ。私の大切な人」

その日の夜、二人を祝福するかのごとく、夜空には無数の星が煌めいていた。

第4話 バイト中に出会う知り合いほどウザい奴はいない（後書き）

「次回からは原作の時間軸編だっさ」

学園都市の無能力者の学生

上条当麻

第1話 やっぱり始まりはダッシュから（前書き）

「不幸だあ

！！」

学園都市の無能力者の少年

上条当麻

第1話 やっぱりは始まりはダッシュから

[illegible]

「いやアア ああああああああああああああああああああ
 ああああああああああああああああああああああああああ
 ああああ!!! 何でいつもこんな目に!?!」

梅雨が終わって昼が長くなってきたなー、と感じないでもない日
俺は夜の学園都市を全速力で駆け抜けていた。スタミナは無い方な
ので肺が限界を知らせている。気を抜いたら吐きそうなくらいキツ
イ。うえ

俺は麦野龍華。この学園都市の高校二年生だ。

すでに知っていると思うが、俺の姉は学園都市の第四位の超能力者だ。因みに俺は第八位。

本題に入ろう。

一体なんで俺はこんな風に学園都市を駆け抜けているのか。答えは簡単。

風紀委員の仕事中に能力が暴発してしまつて何の罪のない不良たち数名をぶつ飛ばしてしまつたからだ。あ。去年から俺、風紀委員ジャッジメントになりました。知り合いから誘われて、じゃあ挑戦だけでもしてみるかー、と試験を受けたら見事合格。俺自身も驚愕だ。

所属している支部は第一七七支部。常盤台中学が近く、俺の家からもそんなに離れていない場所だ。まあ、家って言うても今の俺は寮生活なんだけども……。

高校は無能力者が多い学校に通ってる。色々あって長点上機は

駄目だったんだ。理事長ぶつ飛ばしちゃったし。風紀的にもアウトだったらしい。意味分かんね。

余談だが、俺の容姿は中学時代に比べて一段と女らしくなった。

…………… 自慢じゃねえよ。まったく嬉しくねえもん。なんで髪が異様なぐらい伸びるんだよ！！ 先月切ったばっかなのにすでに肩ぐらいまで伸びてますけど何か！？ 女の遺伝子のチカラ半端ねえなオイ！！

閑話休題

ふう…………… まあ、とにかくだ。今はあの不良たちから逃げることを優先するべきだ。能力を使えばいちころなだけどさ…………… 風紀委員ジャッジメントとして、問題行動は慎んだ方が良いと言われてるからね。こうして逃げてるというワケさ。

「はあ……………！ ふう……………！ や、やっと撒いたか……………」

やっぱり俺の能力って逃走に役立つよなあー。追い風向けれるし。追っ手に向い風向けられるし。それぐらいの演算能力ぐらい全力で走っていても残ってる。超能力者なめんな。

ふう…と呼吸を整えて学校の男子寮へと戻るために足を進める。すでに門限は過ぎてるけど窓から入れば問題ない。こんな時の為にいつも窓の施錠は解いてあるんだ。

しかし、この非常識で構成された学園都市は予想外なことを発生させる。

「待ちなさい龍華！！ 私と勝負よ！！」

「……………」

ベージュ色のサマーセーターにプリーツスカートを着用している茶髪で短髪の少女が俺の前に仁王立ちで立ち塞がったんだ。前髪とつか体中から電撃をバチバチと放出しているこの少女の名前は御坂美琴。去年ぐらいに学園都市の第三位になった能力者だ。おめでとーございます。ぱちぱちぱち。

そんな御坂を死んだ魚の目で見ていた俺は溜め息を数回吐くと、

「なんで今日は俺？ 当麻のどこにでも行けよ。それか一方通行」
アクセラレータ

「っ……あ、一方通行はその……いいのよ……」
「ふうん？」

最近になって一方通行の話題を出すと、御坂は暗い表情をするようになった。理由は教えてくれないから分かんねえけど、部外者の俺が立ち入っていいような話じゃないとは思ってる。本人たちに解決させないと駄目だと思うしな。

って待てよ？ このモードのときの御坂には巨大なスキができるハズ……ッ！！ いけるっ！！

「三十六計逃げるにしかずっ！！ あばよ御坂！！ また来週うゝ
！！」

「あつ！？ ちょ、ちよつと！！ 勝負しなさい！！」

止まれと言われて止まるバカはいない。俺は風で背中に四つの竜巻を発生させて男子寮へと飛んで帰った。

「ふああ……おはよう……」

どんなに我慢しても口から洩れてしまう欠伸をしながら教室へと入る。始礼時間が近いせいかクラスには大勢の人が集まっていた。俺はそんな教室の窓際の一番目の席に鞆を置いて腰かける。

その数秒後、チャイムが鳴って朝礼が始まった。ガラツと教室の扉を開いてピンク色の小動物が教卓のもとまでトテテと小走りで行ってきた。そう、小動物が。

「はいはい座りやがれ野郎どもー！ 今日の朝礼を始めるですよー！」

うーっす！と学生らしい返事を返してガタタツと椅子から立ち上がる俺たち。この小動物には俺たちは逆らえない。何故なら

この人は俺たちの担任だからだ。名前は小萌^{こもえ}。名字なのか下の名前なのかは俺は知らない。とにかくその容姿にあった名前がこの小動物の名前だ。

そんな小動物先生は着席した俺たちを一瞥すると、

「明日から昼休みなのですがー、上条ちゃんと麦野ちゃんは特別補習があるので学校にきてくださいねー」

「嘘お！？」

ガタンツ！と勢いよく椅子から立ち上がる俺とツンツン頭のクラスメート　　上条^{かみじょう}当麻^{とうま}は徹底抗議の姿勢をとる。

そんな俺たちを見て一度溜め息を吐いた小動物先生は、

「上条ちゃんはバカなので補習なのです。麦野ちゃんはー……バカじゃないけど風紀委員としての意識が低いから補習なのですー」

「それはあまりにも酷くないでせうか!？」

「ってちよつと待て!! 俺の補修の理由はそれかよ!! 理不尽だろうが!! そんなことで夏休みの自由時間を減らせて!!? 冗談じゃない!!」

夏休みは学生にとつての楽園。^{パラダイス} そんな俺の夢のような時間を勉強なんかで潰したくない。宿題なんてやる気もないしな!!

すると、小動物先生は勝者のような笑みを浮かべて、ポケットから一枚のメモ帳を取り出すとやけに勝ち誇った態度で、

「麦野ちゃんのお姉さんから承認されてるんですよ? 因みに断ったらブチコロシ確定ね」と書かれているのです」

「やりましょう補習!! いやーっ、やる気出てきたなー!!」
「……………相変わらず姉に弱いのお前……………」

当麻の同情した視線が俺に突き刺さって精神的ダメージをかなり与えた。

そして放課後。小動物先生に補修の日程を聞いていた俺と当麻はトボトボと男子寮を目指して歩いていった。

「はあ……………補習なんてだるい……………」

「そんなこと言うなって。夏休み中あるわけじゃないんだからさー」

「でも当麻、他の連中よりは少ないんだぞ? はあ、淡希に何て言

われるか……」

「うん。そのイチャイチャ話は寮に戻ってから俺と土御門の前でやるな。ボッコボコにしてやるから」

「キスは一回だけだけど経験してるしなーニヤニヤ。世間的な勝ち組だしな俺ーニマニマ」

「そのふざけた幻想をぶち殺す!!」

「うお!? 危ねえ!!」

当麻がいきなり俺の顔面をとらえた右ストレートをかましてきたのを何とか回避。そこから俺は振り向きざまにLEVEL5の能力をフルパワーで利用して風の刃を当麻に向かってぶっ飛ばした。

しかし、当麻の体には傷一つつくことは無かった。

俺が全力で発動した技が当麻の右手にぶち当たった途端に?き消えてしまったんだ。

イマジンプレイカー

「【幻想殺し】だったっけ? 相変わらずチートだよなその右手。超能力者なのに一回も勝てねえもん」

イマジンプレイカー

幻想殺し。当麻の右手に内包されている摩訶不思議な能力のことだ。当麻によると生まれたころから持っている能力らしい。軍覇と同じ原石みたいだよなー。

幻想殺しは異能と呼ばれるチカラならば全て打ち消してしまうというものだ。故に最強。まあ、右の手首から上しか能力は働かないみたいだから他の箇所を狙って攻撃すればいいわけなんだけどさ…当麻ってなぜか攻撃察知能力がずば抜けて高いんだよ。どんな攻撃にも対応しやがるし。本当に人間なのだろうか?

「この右手のせいでビリビリに絡まれるのを考えると不幸以外の何

物でもないけどな」

「お前がワザとでも負けてやればいいーじゃんか。それが電撃を正面から喰らってさ」

「死にますよ!？」 それにこの間わざと負けたらメチャクチャキレられたんだよ」

「そりゃご愁傷様」

まあ、アイツは負けず嫌いでありながら正々堂々とした勝負以外は認めないやつだからな……流石にワザと敗北は無理か。メンドクサイやつ。

おつ。やっと商店街に着いたな。

「じゃ、俺はココで」

「バイトか？ 大変だなー。俺もバイトしてみたいなー」

「俺が入ってから大繁盛なんだよあの店。それに俺宛のファンレターとか結構くるし」

「……… どうせ2割ぐらいは男からだろ。この美少女気味の美少年」
「悪かったな!! どうせ俺は女にモテませんよ!! でもいいもんね!! 俺には世界一可愛い年上の彼女がいるのだから!!」

「その幻想をぶち殺す!!」

「だから危ねーって!!」

当麻の攻撃をひらりひらりと回避しつつ、俺はバイト先の喫茶店に向かった。

「だーっ！ 疲れたー！ 今日は一段と客が多かったなー……っ
とすみません」

バイトが終わって夜遅くになった学園都市をトボトボと一人で歩いていく。仕事帰りの会社員が多いせいで人ごみの中をさーっと通らなきゃいけない。まあ、もう慣れたけどサ。
そんなことを繰り返していると、

「ん？ あれは………御坂か？」

人ごみの向こうに知り合いの姿が見えた。でもなんか違和感がある。頭にデッカイゴーグルみたいなものつけてるし。はて？ 御坂って妹とかかなあ？ いたっけそんなの。

と、そんなことを考えている内に見失った。まあ、いつか。早く今日は家に帰って淡希とメールして、録画してる深夜アニメでも見ようっ。

この時の俺は、あのミサカが親友と大きく関係していることなんて全く知る由もなかったんだ。

第1話 やっぱり始まりはダッシュから（後書き）

「えと……とりあえずその燃え盛る人間、なに？」

学園都市の超能力者の少年

麦野龍華

第2話 交錯する化学<リアル>と魔術<オカルト>（前書き）

「とりあえず俺の出番はあるのか？」

学園都市の第二位の超能力者の少年
督

垣根帝

第2話 交錯する化学<リアル>と魔術<オカルト>

とりあえず、今日の補修はだるかった。

担任から言い渡された残酷な運命の一日目を脆く儚いガラスのハートで乗り切ることに成功した麦野龍華は、バイトには行かずに住居である男子寮へと真っ直ぐ帰宅していた。今日はバイトが非番なのだ。

空は既に夕暮れ時。親友の不幸野郎はさっさと片づけをして寮へと戻っていつてしまっている。なんて友達おもいな奴だろーなーと、麦野龍華は皮肉を込めて呟く。

（とりあえず帰ったら寝よ。あ。淡希へのメールは欠かしてはいけないなー。俺の唯一の幸福な時間しあわせなワケだし）

隣に住んでいる金髪サングラス高校生が聞いたら激昂しそうな現実を思い浮かべながら、麦野はトテトテと男子寮へと向かって行く。もうそろそろ到着だ。

しかし、男子寮の目の前まで到達した麦野の目に、信じられない光景が飛び込んできた。

場所は自分の部屋がある七階。そこに二人の人間と一体の何かがいる。

一人はご存じ上条当麻だ。あのツンツン頭は間違いない。じゃあ、あの赤い髪の長髪コートは一体誰だ？ 少なくとも自分の知り合いじゃない。あんな異端的な格好をしている人を見るのは初めてだ。

そして、あの真っ赤に燃え盛っている人型の物質は一体何だ？ 炎の能力者が作り出した人形だろうか？

麦野がそんな光景を茫然と見つめていた直後、上条当麻がいるであろう七階が爆発に包まれた。

（ツ！？ おいおいおいおい、どうなってんだよこりゃあ！？ 新
手のセールスか何かか！？）

そんなことはありえないと思っっているが、たった今起こった状況に頭が追いついてこない。こんな非日常を経験したことが無い麦野だから仕方がないことなのだ。炎の巨人なんて見たこともない。

（クソッ！ とりあえず当麻を助けに行かねえと！！）

学園都市の第八位はブルブル震えている自分の脚を パアン！と叩いて、男子寮の七階へと向かって行った。

階段を駆け上がっている途中に親友が七階から飛び降りたのが見えたのは気のせいだと思いたいと、息が切れている麦野龍華は一人思案していた。七階から飛び降りて生きている可能性は五分五分だ。人間の体は人が思っているより脆くて儂い。幸運にも自転車置き場の天井がクッションとなつて上条を救ったみたいだ。

そんな上条を見て、麦野は大声を張り上げる。

「当麻 ああああああ！！」

「え、ええっ！？ どうして龍華がそんなところにいるんでせうか

！？ 降りろ！！ とりあえず上には上がるんじゃないやねえ！！」

「あのへんな巨人は何だ！？ 新手の能力者か何かか！？」

「違う！！ 今から警察を呼んでくるから早くそこから逃げ

」

何かを言おうとした上条の言葉が途切れた。そんな上条を見てさらに頭を混乱させる麦野を横目で見ながら、上条当麻は一人考え込んでいた。

（あいつは俺に『地獄の底までついてきてくれる？』と言ってた……そんなことを言われているにもかかわらず俺はあいつを見捨てるのか？ そもそも警察を呼んだところでこの問題は解決するのか？）

頭に白い修道服の銀髪シスターの顔を思い浮かべながら、異能力を打ち消すチカラが宿っている右手のコブシを力いっぱい握りしめる上条当麻。所有している能力名は【幻想殺し^{イマジンブレイカー}】。

上条当麻は右手のコブシを見つめて思う。

そろそろ見捨てるなんて言う発想をしてしまう自分という名の幻想をぶち殺すときなんじゃないのか？

考えてみれば話は簡単だ。やらなければならないことは一つしかない。

（へへっ。そうだよ。俺はインデックスを助けるんだ。怖いさ逃げ出したいさ。でも……ここで逃げ出しちゃったらもう俺は変われない。成長できないんだ！！）

ニイツと笑みを浮かべた上条は五階付近にいる麦野の方に視線を向けると、

「オイ超能力者^{レベル5}！！ 俺がそこに戻るまでの間、炎の巨人を足止めしといてくれねえか！！」

「状況もつかめなくて何が何だか分かんねえけど、今はお前の言うとおりにしといた方が良さそうだな！ 了解！！ 何時間でも足止めしててやんよ！！」

そう言い残した麦野は七階への階段を二段飛ばしで上がっていく。七階へと昇っていつている麦野を見ていた上条は、

（そついやあ、あんなに炎が上がっているのになんで火災報知機はならないんだ？）

火事以前に煙にも反応する警報搭載の赤いランプを思い浮かべる上条。

ん？ 火災報知器？

「うわあーお……流石の麦野さんもこればかりは予想してなかったね」

七階へとたどり着いた麦野龍華の目の前に、先ほどの赤髪ロングと炎の巨人が相変わらず突っ立っている。その後ろにはなぜか血まみれの修道服の少女が。

普通に考えて、被害者がシスターで加害者がコートなんだろう。
見た感じ悪そうだし。性根が腐っていきそうだし。

赤い髪の人 スティル＝マグヌスに麦野は相変わら
ずのダウンナーな視線を向けると、

「一人の子供をボツコボコにして調子に乗ってるクズがこんなところにいるなんてなあ。世界は狭い狭い」

「さっきのヤツにも言ったけど、これは僕じゃなくて神裂がやったんだけど……ま、言っても分からないと思うけど。とりあえず僕の邪魔をしないでくれるかい？　あまり時間が無いからさあ……！」

言葉に怒気を込めながら、スティル＝マグヌスは炎の巨人

イノケンティウス
魔女狩りの王で麦野に攻撃を仕掛ける。

しかし、触れたら最期、人間の体など溶けてなくなってしまうほどの熱が接近しているという状況を前にして、学園都市の八人しかない超能力者の八人目は子供の様な笑みを浮かべると、

「炎、か……。運が無かったなあお前。ああ、ホントに運がねえよ。
水とか土とかだったら良かったのにな」

刹那、絶対的な存在である魔女狩りの王の体の炎があっけないと思えるほど簡単に？き消えた。

「……………は？」

あまりにも信じがたい光景を目の前にマヌケな声を出してしまうスティル。そりやそうだ。少年が動いたわけでもないのに炎が消えた。普通ならばありえない。非常識だ。

そんなマヌケな表情を浮かべているスティルに獰猛な笑みを浮かべた龍華は靴のつま先で地面をトントンと鳴らす。

「炎つてのはさあ、風を受けると消えるじゃん？ まあ、俺も良くは知らないけどさ。それならさ、一火どころか炎でさえも消えてしまっほどの強風をソレに当ててしまえばいいんじゃないの？」
「なっ……」

炎には風。蠟燭に灯った炎も、突風が吹けば簡単に消えてしまう。例外もあるにはあるが、超能力者である麦野はそんな法則をぶち壊す。

「俺は風を司る超能力者だ。風関係のことなら、ルールなんて俺の自由。あんまり超能力者をなめんじゃねえぞ」

高すぎるレベルゆえに能力の本気を出したことはあまりない。しかし今は状況が状況だ。能力のリミッターを振り切っても誰も怒らない。

「さーで、とりあえず俺にとっては他人であるお前、ブチコロシ確定な」

「……………ふふっ」

と、その時。ステイルⅡマグヌスが麦野の後ろを見て笑いを零した。

「ああ？ 恐怖のあまりに神経トンじまったのかあ？ そりやまた、尚更殺し甲斐が無くなっちまう」

「……………超能力者？ 風を司る？ 笑わせるな。僕の切り札はまだ死イノケンティウスんじやいない」

真後ろから溶けてしまいそうなぐらいの高温を感じた直後、麦野

の背中に衝撃が走った。

「ぐっ、ごあああああああああああああああああああああ
ああああああ!!」

背中を押えてのた打ち回る。普通の火傷なんて言うレベルを超えているケガに頭が追い付いてこない。痛みが全てを支配した。

おかしい。演算式を組み立てて風の結界を張っていたはずだ。炎がその結界を通り抜けるなんてことが起きるはずがない。なのになんで自分は攻撃を受けている？

「テメ……能力者じゃ……ねえのか……」

「そういえば君には説明していなかったね。僕は……魔術師さ」

魔術。

この学園都市とは全く接点が無い存在。見たことも聞いたこともないその言葉に頭が疑問符を叩きだす。理解が追い付かない。痛みで演算も組めない。

いとも簡単に無能力者レベルになってしまった麦野を、ステイルは見下ろすと、

「さっきの言葉を君にそのまま返すよ。殺させてもらうから。まあ、こっちにもルールはあってね」

懷から一枚のカードを取り出すと、

「【Fortis931】。一応これは魔法名って言うんだけど、
 そうだね。こっち側に分かりやすく言うとか殺し名かな？」

「っ」

麦野がコブシを握りしめてステイルを睨みつけた直後、辺りが人工的な水流に包まれた。

（これは……火災報知機のスプリンクラー……？）

火事が起こった時ぐらいにしか起動しない安全装置が作動した。相手が炎を使っている時点で作動しないとおかしい機械が。

がここ

痛みで意識が朦朧としてきている麦野の耳に、そんな意味不明な音が聞こえてきた。そしてその直後、チン という音が聞こえてきて、ああ、エレベーターか。と、納得する。

修道服の少女の前で立っている魔術師？の男は何故か小刻みに震えていた。おそらく、エレベーターがここまで上がって来た理由が分からないのだろう。しかし、麦野龍華は分かっていた。

カッンと、びしょ濡れの床の上に一步踏み出す音が響く。

上条当麻がそこにいた。

上条当麻はボロボロの麦野を見ると、

「大丈夫か？ 超能力者さん」

「皮肉……込めてんじゃねえよ……痛う」

「相変わらずダメーじには弱いな。もつと体鍛えろよ」

「うっせえ……」

この場にはそぐわない日常的な会話。それは彼ら二人の余裕の表れだ。勝機が見えた。

そんな二人をぼーっと見ていたステイル「マグヌスはやけに震えた声で、

「イ、イノケンティウス魔女狩りの王はどうしたんだ……？ 追尾性のはずなのに……」

「ああー。あれな。なんていったかなあ？ そうそうルーンだよルーン。あれってさ、コピー用紙の直接書いてあつただろ？ だから……激流でインクを洗い落とさせてもらつたんだよ」

ジュツと、イノケンティウス上条当麻が魔女狩りの王に触れた瞬間、全てが空気に溶け消えた。

「い、のけんていうす……イノケンティウス！！ イノケンティウス魔女狩りの王！！」

おもちゃを無くした子供の様に喚き散らすが、現実是不変ならない。無くなった物は復活しない。

そんな子供なイカレタ魔術師の方を上条当麻は睨みつけると、

女の子にモテるわけではなく、幸運にもなれるわけではないその右手を、ふざけた魔術師の顔面に叩き込んだ。

第2話 交錯する化学<リアル>と魔術<オカルト>（後書き）

「とりあえず……寝とけよお前」

学園都市の第八位の超能力者の少年

麦野龍華

第3話 病院の病室って意外と殺風景（前書き）

「本編とは全く関係ないんだけど、メリークリスマス」

霧ヶ丘女学院の大能力者の少女

結標淡希

第3話 病院の病室って意外と殺風景

「イテテ……まさか、一週間も入院することになるなんてな……」

昨夜、魔術師なる神父っぽいヤツから大けがを負わされた俺は、いつもの病院のベッドで療養することになっていた。なんでも、背中の皮膚が赤く焼けただれて骨の直前ぐらゐまで届いていたらしい。院長であるカエル先生から『誰かに背中を溶接されたのかい？ 最近の若者はスリリングだね？』と言われたが、俺は苦笑いを浮かべることがなかった。魔術師に襲撃されましたーって言っても信用されるとは思えない。

「はあ……また入院かあ……」

「しょうがないわよ。下手すれば下半身不随の可能性もあったほどのケガなんだから。おとなしく一週間、ベッドの上で過ごしなさい」

俺が入院したことを知って、淡希がお見舞いに来てくれたわけなんだけど、病室に入って来た途端に顔面に向かってメロンを投げつけるのはどうかと思う。俺、病人なんすけど。

そんなことなど気にしていないように俺の隣に淡希が腰かけて、今に至るといふワケ。

因みに今の淡希の格好は、霧ヶ丘女学院の女子生徒用の制服だ。ボタンを全部ピシッと止めて学生らしい恰好をしている。

以前、淡希が霧ヶ丘女学院の制服を背中にかけて、その下にピンクのサラシを着用しているのを見つけ、土下座をしながら学生らしい恰好になってもらったことがある。だってあり得ねえだろ。ピンクのサラシって……アニメか。

「いやでもさー。淡希以外の人が見舞いに来てくれるって言う保証はねえんだよー……」

「それ、自分で言ってる悲しくならない？」

「かなり悲しい。今すぐココの窓から飛び降りたいぐらいには」

「歩けもしないくせに何を言っているのよ。いいから安静にしていなさい。私はもう帰るから、薬を飲んで早めに寝るのよ」

「お前は俺の親か」

「彼女だけど」

ひゅんつと一瞬で目の前からいなくなる淡希。この病室には俺だけしかないのだからかなり静かだ。物音一つしない。夜になったら幽霊とか軽く出るかもな。

あ。そういえばあのシスターは大丈夫なんかな？ 当麻と一緒にいるみたいだから大丈夫だとは思っただけど……ま、アイツに任せとけば大丈夫だろ。とりあえず今は見舞客を待とう。寂しすぎる。

「はあ……マジ暇。病院ってつまんねーな」

「そんなこと言うなって。結構静かでいいとこじゃねえか」

「でもさー、壁が一面真っ白って言うのも精神的に圧迫感が無い？ もっとこう……カラフルにすればいいのにな……」

今、俺は誰と話してる？

そう思った俺は、ビュンツと入口の方を向く。

「よう。ケガの具合はどうだい？」

「帝督……せめてノックとかしてから入ってくんない？ 結構心臓に悪いぞその進入方法……」

「悪い悪い。俺に常識は通用しねえからな。物音ひとつ立てずに進

入。これがやつぱり醍醐味って奴じゃね？」

「知らねえよ。そんな子供みたいなことすんな。能力から子供っぽいのに中身も子供じゃあ、取り返しがつかねえだろ」

「え？ 殴ってほしいのか？ 記憶が全部ぶっ飛ぶぐらいの威力で顔を殴打してやつてもいいけど」

「ゴメンナサイ」

体が動かないので、とりあえず口だけで謝罪をしておいた。病人は辛いね。

俺の謝罪を受けて、一度溜め息を吐いた帝督は、俺の隣の丸椅子に腰を下ろした。足を組んで座っている帝督がホストの様に見えるのは気のせいか？ クソツ。このイケメン野郎め。

「ムフポイント【座標移動】は見舞いに来てねえのか？」

「お前の数秒前に帰ったよ。絶対に安静にしとけて釘を刺してな」
「相変わらずラブラブだなお前ら。妬ましいほどに憎たらしい」

「黙れホスト。お前、そこらへんの女に笑顔ふりまくだけでわらわらと集まってくるだろうが。この人間収集機め」

「フツ。それは違えな龍華」

俺の皮肉にイケメンスマイルを浮かべた帝督はドヤ顔を決めると、

「俺は本気の恋しかしねえんだ。笑顔を振りまくだけで寄ってくる女なんかには用はねえ。俺は……外見以外で寄ってくる女と付き合い
てえからな」

「へー」

「えっ、ちよっ。何その薄いリアクション……」

「そんな女、この世に存在すんの？ よっぱど捻くれてんじゃねー
の？」

「それは流石に酷えだろ！！ お前ホント、俺のことどう思っ

だ!？」

「ホスト崩れのチンピラ野郎」

「ぐっ……言い返せねえ」

言い返せねえのかよ。

と、こんな風に野郎二人のなんとも寂しい会話を小一時間ほど継続していると、俺の病室に新たな訪問客がやって来た。

「龍華あー、見舞いに来たぞー」

「龍華、私たちが超見舞いにやってきてあげましたよ」

「結局、私たちが龍華の見舞いに来るしかないって訳よ」

「りゅうか、大丈夫？」

「あ。沈姉。^{しずねえ}それに絹旗たちまで。サンキュー」

やって来たのは沈姉&姉経由の知り合いである絹旗、フレнда、滝壺の四人だった。

茶色のボブカットのセーター少女の絹旗は、相変わらず太ももがバッチリ露出している。マジエロいっス絹旗さん。

ベレー帽をかぶった金髪少女のフレндаは、ニヤニヤとした怪しい笑みを浮かべていた。何をやる気なんでしょうね、この幼女は……全身ピンクのジャージ姿の脱力系女子である滝壺は、死人のような目つきで俺を心配そうに見つめていた。俺が思うに、この4人中で一番まともなのがこの子だ。知り合いのスキルアウトに紹介したいぐらい。

(ってアイツもアイツで今頃何やってんだろーなー)

相変わらず車を盗み続けているんだろーか? それともATMを

奪って警備員から逃走してるのだから？
アンチスキル
 できないこと、やってんだろーなー……
 まあ、俺には到底想像

「全治一週間だつてね？ あー、私の弟なのに勝負に負けるなんてな……姉として恥ずかしい！」

「そつちですか！？　もう少し心配とかしてくれてもいいじゃないか！　背中を丸ごと失ったようなもんだぞ！」

「それにしては超元気いっぱいですね。【未元物質】^{ダークマター}にエロ本でも超渡されましたか？」

「オイコラその中学生。人を欲求不満の男子高校生みてえに言うんじゃないよ。俺は別にエロ本なんて持つちやいねえ」

「ハッ！ 風紀委員の能力者にデレデレしてるザコ超能力者が一体何を言ってるんだか。 なっさけないにゃーん」

風紀委員の女に帝督がデレデレ？ 全く想像できない。ってゆーか、想像すると頭が拒絶反応を起こしているよーな気分になる……
うええええええ……

「（ブチ！）お……表出やがれ第四位いいいいいいいいいいいいいい！！！」

「上等だ第二位！！　ブチコロシてやる！！　その顔をゾンビもビ
ツクリなぐらいのブサイクフェイスに整形してやるよおおおおお
おおおおおおおおおおお！！！！」

火花をバチバチと鳴らし、メンチを切り合いながら超能力者二人が病室から退場した。ケガ人とか、出なけりやいーけどなー……あの二人、手加減とか知らないし……軍覇にでも止めてもらうように頼むか？

そうやって俺が災害を食い止める方法を示唆していると、病室に

まだ残っていた女子三人がやいのやいの話し出した。

「それにしても超殺風景ですねこの部屋。花とか置かないんですか？ 私持ってきてもいいですよ？ 鉢植え」

「死ねって言うてんのか！？ 言っとくけど、この状態でも強能力者ぐらいのチカラは使えるんだからな！？」

「強能力者ぐらいの強さじゃ結局、絹旗には敵わないって訳よ。もつと高位の能力者レベルのチカラを使わないとねー」

「ふれんだ、貴女は無能力者でしょ……？ あんまりりゆうかにそんなこと言っちゃ駄目」

「はいはい。結局、滝壺は龍華に優しいって訳ね。知ってる？ コイツって彼女持ちなのよ？」

「知ってる。あわきとは親友だから。クラスメートだし」

「へえ、そうだったのか。学校でのアイツって、どんな感じなんだ？」

「みんなのお姉さん。いつもクラスメートの相談に乗ってあげてる。あわきは優しいの」

「ははっ、そうだな」

確かに淡希は人一倍優しい女だと思う。俺が風紀委員の書類を残業してまとめているとき、文句を言いながらも最後まで手伝ってくれたし、乙金が風紀委員の仕事中にスキルアウトに絡まれたときも、淡希は乙金を救出してくれたみたいだしな。

あ。因みに乙金ってゆーのは俺の同僚だ。まあ、後々話すこともあるだろう。とりあえず流しとけ。

「この間、あわきがクラスでやけに機嫌がよかった時があったよ？」
「アイツが？ 何で？」

クールキャラのアイツが人前で素の自分を出すとは到底思えない

んだけど……

「えっとね、確かりゅうか関連のことで……」

「へ？ 俺関連？」

なんかのど渴いたな……そういえば冷蔵庫にコーラがあったハズ……見つけ。

キャップを開けると、パシユツという景気の良い音が鳴った。この音が好きなんだよねー。

ゴキユゴキユ

「先月ぐらいにりゅうかに初めてを奪われたって言ってた」
「ぶーっ！！」

俺の口から、見事なアーチ状のコーラの橋が現れた。

「うえ、超汚いです。ちゃんと拭いてくださいよ？ ケダモノ」
「そうねー。結局、龍華はケダモノだって訳よ。このケダモノ」
「三回も言わないで！？ 俺のハートって意外に脆いんだよ！？
そしてケダモノじゃない！！」

「超ウソですね。高校生の初めてを奪うって行為自体がケダモノなんですよ。この獣」

「レベルがある意味ダウンした！？」

「かわいそー。結局、結標も騙されてたって訳よ。このクソ虫にね」
「お前！ 言うに事欠いてクソ虫呼ばわりか！！ お前らもう出てけ！！ 俺に安息の地を与えてくれよ！ 確かに寂しかったけど、こんなのは望んでねえんだよ！！ 俺はなあ！！ もっと、こう。ラブコメ的な感じがよかったんだ！！ それなのに！ それなのに！ お前らがそれをぶち壊しにしゃがったんだぞ！？」

第3話 病院の病室って意外と殺風景（後書き）

「当麻……………だよな……………」

学園都市の第八位の超能力者の少年

麦野龍華

第4話 衝撃の事実（前書き）

「あれ？ 俺の出番は……？」

学園都市の第二位の超能力者の少年

垣根帝督

第4話 衝撃の事実

「そろそろ退院だ……ふう、長かったー」

この病院に入院してから3日たった今日、特にやることもなくぼーっとしていた。今日の訪問者は淡希と軍覇の2人だけ。それも用事があるとか言って2人ともすぐに帰ったからかなり暇だ。

「そついえば昨夜、急患が運ばれてきたんだっけ」

なんかドタバタとしていたからなあ。カエル先生も焦った感じだったし。そんなに重体だったのかねえ。まあ、俺も沈姉しずねえとのケンカの後はいつも重体だったけどな！ 勝てねえよあんな能力持っている奴に。俺の能力が全く齒が立たないあの能力に勝てる奴は俺が知る限り当麻と一方通行と帝督ぐらいじゃないだろうか。あの3人もチートだからなんだけどさ……

『とうまのバカア

！！！』

バーン！！

「な、なんだ！？」

突然病院に響き渡る轟音と絶叫。俺の鼓膜を急激に刺激したその声は、隣の病室から聞こえてきたようだ。あの轟音は扉を閉める音かな？ どんな威力で閉めたんだか……って、

「今、【とうま】って言ったか？」

俺の隣の病室には昨夜の急患が運ばれているハズ。っつーことは、当麻が大けがしたっつーことか。ったく……相変わらずケガが多いやつだなあ。

ま、俺は人のこと言えねえけどさ。

「とりあえず当麻だつてわかった以上、見舞いに行つてやりましょーかね。寂しいだろーし」

ベッドの横の車いすに体を預け、病室からゆっくりと出る。横にスライドするタイプなので出入りに不便はない。ユニバーサルデザイン万歳。

そして隣の病室の前まで車いすを移動させ、扉に手をかけ

『本当は君、何も覚えていないんだらう?』

「……………え?」

俺の思考は完全に一瞬だけ、

停止した。

白い修道服の銀髪シスターがブチ切れて飛びだした後、この病室

には、上条当麻一人が残された。体のあちこちには無数の菌型。右手で押し続けているナースコールが唯一の救済策とでも言えそうな光景だ。

そんな上条のもとに、一人の訪問者が現れた。【冥土帰し】^{ヘンキャンセラー}と呼ばれているこの病院の院長だ。

【冥土帰し】は上条の惨状を見て嘆息すると、

「ナースコールが鳴ってたから来てみたんだけど……君は入院期間を延ばしたいのかい？」

「はは……ははは……これは死ぬ。マジで死ぬ……」

言葉通り死ぬんじゃないかと勘違いさせるような表情を浮かべる上条を数秒見つめていた【冥土帰し】^{ヘンキャンセラー}は、しばしの間沈黙すると、

「けど、あれで本当に良かったのかい？」

「へ？ 何がですか？」

「君、本当は何も覚えていないんだろう？」

^{ヘンキャンセラー}

【冥土帰し】の問いに、沈黙を返す上条当麻。そう。上条当麻の記憶は戻ってなどいないのだ。

上条当麻の病名は【記憶破壊】。脳内に保管されている【エピソード記憶】を細胞ごと破壊されてしまっているのだ。

もちろん、思い出せるわけもない。【記憶喪失】とは深刻さのLEV E Lが段違いで違う。だって、記憶をため込んでいた細胞ごと消失してしまっているんだから。

ガラッ

「どういう……今の……ウソだろ……？」

突然現れた訪問者にビクウ！と極度に反応する上条。 【冥土帰し^{ヘブンキャンセラー}】

は分かっていたのか反応が無い。

突然の訪問者である麦野龍華^{とうまのしんりゅう}は驚愕に染まった表情のまま、上条のもとへとふらふら歩いていくと、用意されていた丸椅子にドカッと腰を下ろす。

「カエル先生……当麻の記憶が無いつて……」

「記憶が無いというより、今までの思い出が無いつてことなんだけどね？ 【エピソード記憶】をため込んでいた細胞ごと消滅してしまっているらしくてね？ まず思い出すのは無理だろう？」

「そ、んな……」

ぽたっ ぽたっ と小奇麗な病室の床に、麦野の目から零れ落ちた涙が溜まっていく。時間がたつにつれて勢いは増し、嗚咽も含まれていく。

「俺が……大けがなんてせずに……えぐ、当麻と一緒に魔術師と戦っていれば良かったんだ……LEVEL5なのに……学園都市で8人しかいないLEVEL5なのに……うえ……親友の記憶すら取り戻してやることができねえなんて……」

「君が落ち込むのはお門違いだと思うけど？ もし君が大ケガをしてなかったとして、本当にこの子の記憶破壊を防ぐことができたのかい？ 僕はこの子がどうやって記憶を失ったのかは知らないが、非常識なチカラによって頭部に深刻なダメージを負っていたということだけは分かっているつもりだよ？」

「……………」

確かにそうかもしれない。自分がその場にいたところで状況は変わっていないかったかもしれない。当麻が倒した魔術師にすら勝てな

かったのだから。

何が8人しかないLEVEL5だ。

何が第四位の弟だ。

何が最強の風紀委員コンビの片割れだ。
ジャッジメント

親友一人すら守れない自分が……許せなかった。

「……………あろう」

すると、今まで黙って麦野と【冥土帰し】ヘンキヤンセラのやり取りを見ていた
透明な少年上条当麻は、妙に他人行儀に麦野に声をかけると、

「俺……今までの思い出とか何も覚えてないけど……別に後悔とかしてないんだ」

「……………」

「家族のことも友人のことも全く覚えていないけど……これからその関係をもう一度作り直していけばいいと思うんだ」

「作り……直す……………」

「でさ、なんか恥ずかしいんだけど……………」

透明な少年は、

「俺と、友達になってくれないか？」

目が眩むほど綺麗な、

「……………ああー！！　よろしくな、当麻ー！！」

虹色を持っていた。

麦野龍華が上条当麻の事実を知った日の夜、麦野は上条の病室に残ったままだった。これからのことを話し合うらしく、メモ帳やらカレンダーやらが所狭しとテーブルの上に並んでいる。

「なあ龍華。俺、学校への道順すら覚えてないんだけど」

「大丈夫だ。俺はお前の二個隣の部屋に住んでいるからな。学校へ行くたびに訪問してくれりゃあ良い」

「なんか、迷惑かけてゴメン……」

「なあに、俺たちは親友だろ？ これぐらい迷惑の内にも入らねえよ」

とりあえず。と麦野はメモ帳を掴んで言う。

「お前はあの銀髪シスターにウソを吐いているわけだ。とびっきりの大嘘をな」

「ぶっちゃけてんなあ……自分がしたことながらに罪悪感が」

「今更だろ。俺が言えるのは、相手が気づくときまで隠し通せ。もちろん、その銀髪シスター以外のお前の関係者にもだ。つつーか、俺以外のヤツにはバレルな」

「それ、結構無茶だよな」

「無茶でもやるんだ。それとも何か？ 上条当麻クンは自分が記憶

破壊されているから貴方のことは知りませーんとも吹聴すんのか？」

「なんでそう悪い方向へ傾けて言うんでせうか！？ 流石の上条さんもそこまで悪人じゃないぞー！？」

「だったらやれ。なあに、問題はないさ。お前の友人はみんな変わりモンだからな。一般人となんか雰囲気が違う連中は全員お前の関係者だ。自分で言うのもなんだけどなー」

「……………俺、どこで人生のレールから脱線しちゃったんだろっ？」

「【^{イマジンプレイカー}幻想殺し】を持っていてる時からすでに脱線してるだろ。これがお前の運命だ。諦めろよ英雄^{ヒーロー}」

「いや英雄^{ヒーロー}って…………俺、そこまで凄いことしてないし」

「は？ 自分の記憶と引き換えに少女を救いだしたって行為自体が英雄^{ヒーロー}なんだよ。俺にはとても真似できない。…………いや、淡希がそのシスターの状況に陥っていたら真似できるかも。うん。やっぱりお前は英雄^{ヒーロー}じゃねえや。」

「テメエ…………好き勝手言いやがって…………」

ボロボロの右手を爪がめり込むぐらい握りしめる上条を見て、麦野はゴメンゴメンと平謝りを返す。

「お？ もうこんな時間か。んじゃ、俺は病室に戻るよ。そして愛しの彼女とメールやら電話やらしてくるのサ」

「死ね！！ とりあえずその窓から飛び降りて死ね！！ リア充爆発しろー！！」

「学校の女子ほとんどを落としたヤツにだけは言われたくなかったんですけどー」

「え！？ 今のどっいつに」

「んじゃなー！！」

車いすを完全に掌握した麦野は、レーシングカー顔負けのドリフトを見せながら隣の病室へと戻っていった。そして今隣から聞こえたガラスの割れるような音と『止まれえええええええええええええええええ』という叫びは嘘だと思いたい。

「……」

そんな騒がしくて面白い親友の顔を頭に思い浮かべながら、上条当麻は子供の様な笑顔を浮かべると、

「俺……良い親友持つてるんだなあ」

他人事のように呟いた。

麦野が窓から決死のダイブを見せた日の同時刻、学園都市の第七学区の裏路地にて。

「ぐはっ！」

薄汚れた地面にごろごろと転がって来た高校生ぐらいの少年がいた。右腕に緑の腕章が付いているところを見ると、どうやら風紀委員のようだ。

その少年の体のあちこちには無数の火傷と痣があり、目にも力がこもっていない。

カッ　カッ　という甲高い音が裏路地に響き渡る。誰かの靴の音だ。

「テメエ……それでも相当、そうとう風紀委員か？ 駄目だな。オレが憎んでいるヤツと比べりゃあテメエはクズみてえに相当弱え。月とスツポンだ」

靴の音の主の跳ねが多い黒髪には、透き通った青色のゴーグルが煌めいている。

襲撃者の少年はゴーグルに手をかけると、目を保護するかのよう
に装着する。

「まあ、殺しはしねえよ。オレだって犯罪者とか相当嫌だしな。豚箱なんか相当クソ喰らえて感じた」

「お前……こんなことして無事で済むと……」

「ん？ まだ息があつたんか？ 相当意外としぶてえな。かつ！ その無駄にデケエ図体は飾りじゃねえってかあ？ 相当将来は力士でーすってかあ？」

壊れた機械の様に体を大きくふるわせ始める少年。瞳は狂気の色に染まっており、ジャッジメント風紀委員の少年などゴミ程度にしか思っていないのだろう。

すると、ゴーグルの少年の右手の手のひらに、神々しいほど煌びやかな光が集束しはじめた。闇に染まっていた裏路地が昼の様に明るくなる。

「オレさあ、能力開発とか相当してねエクチでさあ。生まれたときからこの能力持っているわけっしょ。んで、危険因子だとかそういう理由で昔さあ、相当ボコられてんのよね。ジャッジメント風紀委員を名乗る連中に。理不尽だよなあ。相当理不尽だよなあ。人より強大なチカラを持つっているって言う理由でよあ、命を狙われるんだぜえ？ そりゃ

あ、相当、復讐しかえしとかしたくなるのも分かるよなあ！？」
「止めて、くれ……ぐああああ！！」

ドカツ！ と、風紀委員ジャッジメントの少年の腹を蹴り上げる。力が強いのか、
ゴージャルの少年の蹴り一つで、風紀委員ジャッジメントの少年は宙を舞った。

「とりあえず、半年ほど相当病院で過ごせやコラ」

数時間後、裏路地を通ろうとした不良学生は、

体中に大やけどを負った風紀委員ジャッジメントを発見したという。

第4話 衝撃の事実（後書き）

「次回から、新章開始するわよ。アタシの活躍にも、乞うご期待」

第一七七支部の風紀委員の大能力者の少女

ジャッジメント

おとがねらいか

乙金来夏

第1話 第二七七支部の風紀委員（前書き）

「新章開始ですの!!」

常盤台中学の大能力者であり風紀委員である少女

ジャッジメント

白井黒子

第1話 第一七七支部の風紀委員

とある夏の日、ジャッジメント風紀委員の第一七七支部の中は大騒ぎになっていた。キーボードをたたく音や言葉のやりとりなどが飛び回り、騒々しくなっている。

「龍華は！？ あのナマケモノは今どこにいるの！？ アタシの仕事が多すぎて困ってるんだけど！！」

闇のような漆黒の黒髪をポニーテールにしているやけに巨乳の少女が額に十字マークを浮かべ、壊れるんじゃないかと錯覚させるような勢いでキーボードを叩いている。

彼女の名は乙金来夏。おとがねらいか霧ヶ丘女学院に通う高校一年生だ。所有する能力の名前は「サイフレイク念動破砕」。体の周りに念動力の膜を展開して、相手に極限まで強化した物理攻撃をする能力だ。因みに、物体の操作は不可能だ。彼女にそこまでの集中力はない。

「今こっちに猛ダッシュで向かっているそうですよ？」

「はあ……まったく。あの先輩には困ったものですわね」

頭に大量の花を咲かせた少女とツインテールの少女がパソコンの画面を見ながら嘆息する。彼女たちの名は初春飾利と白井黒子。まあ、説明は必要ないだろう。

そんな彼女たちの解答など聞いてもいない乙金は、キーボードを叩く速度を上げると、

「いつもいつもいつもいつもアタシばかりがアイツの尻拭いでええええええええええええ……殺す。今日こそはあいつをガチ

で殺す。アタシの本気の右ストレートであの女顔をぶち壊してあげるわああああああああ。クツフフ。フフフフフフフフフフフフフフフフフフ

「やばいですねアレ。そろそろ誰かが止めないと龍華さん、本当に死んじやいますよ?」

「それはそれで更正の余地がありそうだからいいんじゃないのです? どちらにしろ、あの先輩には逃げ道など残されていないんですから」

「それもそうですねー」

自分の後輩にすら見捨てられるLEVEL5。普段からの日ごろの行いが悪いからこうなるのだ。習慣は大事だ。人の信頼を保てるかどうかに関わってくるのだから。

その時、

バーンッ!

「せ……セーフ?」

「……アウトだコラ」「」

勢いよく滑り込んできたナマケモノのLEVEL5の言葉に、その場にいる同僚や先輩や後輩が口を揃えてアウトを宣告した。最近の仕事の多さに皆、イライラが募っているのだからしょうがない。彼らはまだ学生なのだ。

そんな^{ナマケモノ}麦野にふらりふらりと歩み寄る人物が一人。先ほどの乙金来夏だ。

「りゅうううううううかあああああああああああ」

「ら、来夏? なんでそんなにコブシをぎゅっと握りしめてこっち

によつてくんの？ こ、怖えんだけど……」

「アタシがアンタの分の仕事を任されて早二日。キーボードを叩きすぎて腱鞘炎けんしやうえん気味なんだけどさあ」

「そ、そうか。それはゴメンな。ゴメンゴメン」

「あゝ？」

「マジでゴメンナサイ。悪気はなかったんです。ただ……淡希とのデートで時間を潰しちゃってただ」

「一遍死んで来い！！」

「おゴフう！！」

大能力者のそこそ本気の右ストレートが、学園都市の第八位の鳩尾に見事にクリーンヒットした。しかも何故かコークスクリュー。麦野に襲い掛かったダメーシの大きさは計り知れない。朝飯を吐き出さなかっただけ十分だろう。

地面で顔を真っ青にしてのた打ち回っているバカを一瞥すると、乙金来夏は全員の顔を見渡して、

「さて、全員揃ったことだし……本題の話し合いと行きましようか」

ジャッジメント

第一七七支部に所属している風紀委員の全員が、仕事場である部屋の中に集結していた。空間移動系の大能力者や超絶級の腕前を持つハッカー。透視能力を持つ能力者。強力な怪力女子高生と学園都市の第八位の超能力者もいる。

その中の漆黒のポニーテールの怪力女子学生である乙金来夏は、

巨大な疑似液晶スクリーンを指示棒で示す。

「一週間ほど前、第一三三支部の風紀委員^{ジャッジメント}である強能力者が全身大火傷を負った状態で病院に搬送されたわ。その後、回復した彼は極度の光恐怖症になっていたらしいの」

「光恐怖症？ 目になんか病気でも患ってんのか？」

「いいえ。彼の話によると、光系の能力者に襲われたようね。自分がその光系の能力者に大けがを負わされたからトラウマになってしまっているらしいのよ」

「トラウマって…… どんだけヤバいんだよソイツ…… 早く止めねえと滅ぶぞ、この学園都市」

「……」

麦野が言っていることも冗談ではすまない段階に入っているため、沈黙に包まれる第一七七支部。

乙金はそんな彼らを一瞥すると、

「驚愕に包まれているアンタたちに更なる訃報よ。この事件、犯人と思われている能力者が全く存在しないのよ。っていうか、そもそも光系の攻撃系能力者って言うのが書庫^{バンク}に存在していないのよね。光系の能力者って言うのは、よくて補助系の能力ばかりだから、攻撃力はゼロなのよ」

ま、視力ぐらいは奪えるけどね。と乙金は付け足した。

さらなる沈黙に包まれる第一七七支部のみんなを見て、乙金はため息を一度つくと、

「で。この事件は一番の功績を誇る風紀委員の支部。つまり、この第一七七支部に任されることになったって訳ね」

「……………」

予想はしていたが、言葉にならない。自分たちで果たして勝てるのかどうかわからない未知の能力者。そんな奴に自分たちで勝てるのだろうか？ という疑念に駆られてしまう。

そもそも彼らは学生だ。普通に勉強をし、友人と一緒に遊び、恋をしたり部活をしたりする未成年。戦闘とは縁のない年齢だ。風紀ジャツジメント委員に所属してようがしてなかるうが、そのこと自体に変化はない。

「流石のアタシも全員参加とは言わないわ。正直言って、この第一七七支部でもその能力者に勝てない人がいるからね」

ジャツジメント

風紀委員には高位能力者がほとんどいない。よくて強能力者が多数いるほどだ。大能力者以上の能力者は第一七七支部にいる白井と乙金と麦野の三人ぐらい。何故なら、彼らの仕事は学園都市の安全管理なのだから。

その高位能力者の一人である白井黒子は組んでいた脚を組み替えると、

「わたくしはその任務、参加しますの。これ以上の被害を見過ごすわけにはいきませんし、そもそもわたくしもかなりブチ切れておりますの」

お淑やかなイメージで知られている常盤台中学の制服を着ている彼女だが、今までかなりの激戦を踏破してきた強者だ。そんな彼女がこれらの戦闘ぐらいでは負けることはまずないだろう。

その数秒後、その隣に座っていた初春飾利はすつと手を上げると、

「わ、私も参加します。でも、後方支援しかできないですけど……」

「問題ないわ。そもそもアンタには参加してもらうつもりだったし」

学園都市一と言っても過言ではない初春のハッカーとしての技術。彼女はその技術を最大限に生かして、第一七七支部の皆の後方支援を行ってきた。戦闘能力は皆無だが、情報伝達などに関しては最強だ。

「で、アタシも参加するわけなんだけど……オイそこの超能力者。居眠りしてんじゃねーよ。首の骨もぎ取って地面に埋めるぞ」
「……はっ！」

世界一緊張感が無い風紀委員ジャッジメントと言われている麦野龍華を獣のような目つきで睨みつける乙金。彼女の他の風紀委員ジャッジメントたちも額に青筋を浮かべて麦野を睨みつけている。

そんな彼女を見ていたらと冷や汗を流し始めた麦野は、ニイツと笑みを浮かべると、

「任務に参加するかどうかっただろ？ ちゃんと聞いてたさ。超能力者なめんな」

「参加するかどうかだけ答えりゃいいのよ。それ以外の言葉は発するな」

「酷え！！」

曰ごろの行いが悪い奴には、それ相応の接し方がある。そのことをこの第一七七支部のみんなは理解しているのだ。

完全にアウエーの状態に陥った麦野は、頭を振って邪念を排除すると、

「参加する。流石にこの事態は深刻だ。これ以上放っておくと無関係な学生まで被害者になっちまうかもしれないからね」

麦野龍華は無能な風紀委員^{ジャッジメント}なわけではない。ただ、雑用が面倒くさくてサボっているだけだ。風紀委員^{ジャッジメント}としての能力はトップクラスだと言ってもいい。何て言っただって学園都市の第八位のLEVEL 5なのだから。

その後、透視能力を持っている固法美緯と身体能力を底上げする能力を持つ羽畑翔^{はばたけける}が参加を表明した。

もう参加する意思がある者がいないことを乙金は確認すると、

「今、参加を表明してくれたヤツらには感謝するわ。そうじゃないヤツは今まで通りの仕事をこなしてちょうだい」

そして、乙金は一度息を吐くと、

「参加を表明してくれたヤツらは今から【緊急任務解決班】^{トラブルコンストラクター}のメンバーよ。ちゃんと気を引き締めて任務に当たってちょうだい」

第一七七支部の精鋭がそろった。

【緊急任務解決班】^{トラブルコンストラクター}のメンバーを乙金は見渡すと、

「黒子。ミコちゃんを呼んでくれる？ 今回の任務には彼女も参加してもらうから」

正体不明の能力者討伐の任務に、最強の電気系能力者が参加する。

第1話 第二七七支部の風紀委員（後書き）

「俺から逃げられると思ってるのか？」

長点上機学園の強能力者であり風紀委員である少年

ジャッジメント

羽畑翔

第2話 敵の情報を掴むため（前書き）

「なんつーかよお、相当落ち着かねえって感じだあ」

原石である少年

磯速来斗

第2話 敵の情報を掴むため

「とりあえず、犯人の身元を明らかにしましょうか」

白井黒子が御坂美琴を連れて来たと同時に、
【緊急任務解決班】
トラブルコンストラクター
のリーダーである乙金来夏はそう言った。この【緊急任務解決班】
のためだけにもう一部屋用意されたというのはどうでもいい情報だ。

「どうやって？ 書庫バンクに載っていない能力者なんだろ？ 身元なんてわかんのかよ」

書庫バンクには、この学園都市の全ての情報が保管してある。それは学生のリストも例外ではなく、超能力者であろうが無能力者であろうがすべての情報が保管されている。まあ、閲覧できるレベルというものがあるのだが、今はそれについては論じる必要が無いだろう。麦野の問いに、乙金は御坂が泣き出しそうなほどの大きさの二つの果実の下で腕を組むと、

「それが分かっちゃうのよね。それもすごく簡単な方法で」

簡単な方法？ と麦野が首を傾げるのを確認して、乙金は続ける。

「なあ龍華。都市伝説って知ってる？」

「んあ？ 知ってるも何もかなり有名じゃねえか。【いきなり全裸になる女】とか、【能力が効かない無能力者】とかいうヤツだろ？」

「ええ。その都市伝説よ」

「……………長い。いいから本質を話せ。こっちには時間が無いんだ」

やる気のないダウンナーな瞳の羽畑翔はすーっと目を細めて、乙金を睨んだ。これは彼の癖だ。少し不愉快な気持ちになると、目を細めてしまう。もともと悪い目つきがさらに悪化して、不良の様に見えるてしまうのがたまにキズだ。

「翔、イライラしてるのは分かりますけど、少しは落ち着いたらどうですか？ 急がば回れ、ですよ？」

「……………チッ」

隣に座っていた白井から指摘されて、納得がいかないながらも渋々引き下がる羽畑。彼は幼馴染である白井黒子には弱いのだ。

そんな羽畑を見ていた御坂は、コインを磁力で曲芸のようにくるくる回しながら、

「で。どんな方法をとる訳？ 正体不明の能力者っていうぐらいなんだからさぞかし燃える方法をとってくれるのよね？」

「御坂、久しぶりの戦闘だからってなにもそこまで本気にならなくても……………」

「あの馬鹿とあのもやし以外と本気の力で闘えるのよ！？ これが燃えずにいられますか！」

「あ……………そうっすか。もうすでに戦闘モードに入っちゃってんのね……………」

俺って無力だなーと、窓の外を見つめる。ハトが数羽飛んでいるのが見えたが、気分は別に高揚することは無かった。

そんな彼らを見て、乙金はその巨大な胸をたゆんと揺らすと、

「さっきネットで見つけた都市伝説なんだけどね、【原石】って言うのを見つけたのよ」

原石

それは、学園都市の開発機関の力を一切借りずに、自然の環境の偶然だけで能力を発現した能力者のことを指す。そして例によってその【原石】と呼ばれる者たちの能力は、学園都市が作り上げた能力者が所有する能力と一風変わっている。

説明不能理解不能。それが彼らの能力だ。簡単に例を一つ上げると、第七位の削板軍覇がいる。彼も【原石】と呼ばれる能力者の一人だ。世界最高の原石。彼はそう呼ばれている。彼の能力もまた、説明不能な能力なのだ。

「演算能力なしで能力を発動する能力者。そんな【原石】たちはね、
システムスキャン
身体検査では無能力者と判断されるらしいのよ」

能力の説明ができないので、レベル分けにも該当されない。故に無能力者に分類される。まあ、削板軍覇という例外もいるにはいるが、そこにはあえて触れないでおこう。

乙金はイタズラを思いついた子供の様な笑みを浮かべると、

「【原石】のリストが書庫にはあったハズよね。ミコツちゃんと初春、ちよつとハッキングしてくれない？」
「え」

乙金が考えた方法は、やっぱり常人レベルの手段ではなかった。

数十分後、最強の電気系能力者と最強の守護者の能力によって、
書庫バンクの中に保管されていた【原石】のリストが所狭しと、第一七七
支部の特別本部のテーブルの上に並べられていた。

「……………流石にやりすぎ。下手したら逮捕」

「はあ……………これでわたくしたちも共犯になってしまったんですね
……………さよなら、わたくしの輝かしき青春……………」

数少ない常識人の二人が天を仰いで祈りを捧げているが、テンシ
ョンの上がつている他のメンバーには認識されていない。唯一、龍
華だけが二人を見て苦笑いをしているとっぐらいだろう。

麦野の隣で書類を見つめていた乙金は、あっ　と声を漏らすと、
一枚の紙を手につった。

「磯速来斗いそはやらいと……………山ヶ丘高校に通う高校一年生。LEVELは0か…

……………」

「原石なんだから無能力者なのは当たり前だろ？　ってゆーか、な
んでそれを手に取ったワケ？」

「能力名サテライトよ能力名。【光迅原石】って能力名……………いかにもって感じ
じゃない？」

「いや確かにそうだけどさ……………他にはいねえの？　光系の原石は」
「えーっと……………いないわね。と、ゆーわけで。ビンゴ
……………」

「犯人の特定まで、そんなに時間はかかりませんでしたね」

「そうね。私的には二日間ぐらいかかるもんだと思ってたけど……………
来夏先輩。何で原石のリストの存在を知っていたの？　ってゆーか、
そもそも原石の存在を知っている方が不思議なんだけど」

原石の存在は、トップシークレットだ。削板軍覇のように表に出

ている【原石】もいるが、彼が原石だということを知る人はそんなに多くない。原石という者はそれぐらい貴重なものなのだ。

御坂の質問を受けた来夏は、御坂がイラッとするぐらい大きな胸を揺らすと、

「な・い・しょ」

「……………」

「先輩。こんな狭いところでLEVEL5級の能力を発動しようとしてないでください。私たちも巻き込まれますから」

「だ、そうよ？ おとなしく椅子に座ったら？」

「ぐっ……………」

初春に止められ、乙金にドヤ顔で見られた龍華は、渋々と椅子に腰を下ろした。

龍華が椅子に座ったのを確認して、乙金は全員を見回すと、

「さて、と。じゃあ攻めましょうか。ジャッジメント風紀委員の恐ろしさを、この

原石クンに教えてあげようじゃない」

第7学区の裏路地にて。

磯速来斗はいつものようにジャッジメント風紀委員を搜索していた。例によっていたぶる為だ。

「はあ……………やっぱり相当見たらねえなあ。ちいーつとばかりすぎたかあ？ なんか警備もヤバくなってるし、相当そろそろ本命を潰した方が良さそうだなあ」

クカカ、と狂気に満ちた笑いをもらす。今の彼は正気ではない。昔受けた心の傷が大きすぎて、彼の精神状態を不安定にしているのだ。

もともと人間の精神とはそこまで頑丈ではない。嫌なことがあれば落ち込むし、嬉しいことがあれば元気になる。そうやって簡単に上下するぐらい脆いものだ。

磯速はふうつと溜め息を一度吐くと、

「今日おは出直すとしますってかあ？　はあ。なあんか相当やる気が出ねえんだよなあ。こう、スリルが足りねえって感じ？　一日一人は潰さねえと相当落ち着かないって感じだ」

やはりこの男、歪んでいる。心の傷というモノは致命傷のようだ。

磯速がもう一度溜め息を吐き、家へと帰ろうとしたまさにその時、

「どこへ行くんですの？」

「……………待て」

背後からそんな声が聞こえた。聞き覚えのない若い男女の声だ。

磯速はダルそうな表情のまま後ろを振り返り、声の主がどんな人物かはつきりした途端にニイッと、獲物を見つけた獣のような笑みを浮かべた。

「おーおーおーおー、まさか自分からやってきてくれるとはねえ。

これは拍手喝采した方が相当良いのかあ？」

「いいませんの。どうせ今から貴方はわたくし達によって逮捕されるんですから」

「……………この腕章。これだけで用事は分かるよな？」

「ぎやはっ。ついに来たよオイ。テメエらは相当腕が立つのかあ？
今までのヤツラみてえに俺を相当がっかりはさせねえくれよ？」

磯速の周りが不自然に発光していく。その光はまるで、彼の精神状態をそのまま表しているかのようだ、白井と羽畑は思った。

そして、二人の風紀委員はお互いの得物を構えると、

「……………黒子、油断するなよ」

「そっちこそ。わたくしの足を引っ張らないでくださいですよ？」

「はっはあ！！　なあにをブツクサ言ってるんですかあ！？　こちとら待ちくたびれて相当気が立ってんだっての！！」

そんな声を合図に、風紀委員の二人は攻撃を開始した。

第2話 敵の情報を掴むため（後書き）

「ぎゃはっ」

原石である少年

磯速来斗

第3話 物理攻撃VS光の原石（前書き）

「あけましておめでとございますだ。今年もよろしくね。野郎ども」

第一七七支部の風紀委員である大能力者の少女

ジャッジメント

乙金来夏

第3話 物理攻撃VS光の原石

「はっはあ！！ なぁにをブツクサ言ってるんですかあ！？ こちら待ちくたびれて相当気が立ってんだっての！！」

磯速来斗のそんな挑発的な声を合図に、白井黒子と羽畑翔は一直線に磯速に向かって突っ込んだ。

磯速はそんな二人を見てニイイと狂気に満ちた笑みを浮かべる。今までの連中と動きが違う。こいつ等なら自分を満足してくれるだろう。という思いが頭の中を駆け巡り、彼の戦闘意欲を駆り立てているのだ。

「……………黒子」

「了解ですの！！」

磯速が攻撃を仕掛けようと右腕を白井たちに向けたその時、羽畑の姿が一瞬にして？き消えた。

白井はいまだに磯速の方へと突っ込んできている。どうやら同時攻撃を狙っているようだなぁと磯速は考えを巡らす。

そんな磯速は前後に両手の手のひらを向けると、

「前後同時攻撃は俺には相当効かねえんだよ！！」

轟！！ という音を奏でながら、磯速の両手のひらから大樹の幹ほどの太さがある光線が放たれた。

前には突っ込んできている白井の姿、後ろには白井によって転移した羽畑の姿が。普通ならばこの攻撃が直撃してしまって戦闘不能だろう。

しかし、この二人は風紀委員の精鋭部隊。そんな簡単にはやられない。
ジャッジメント

「……………加速」

そんな呟きを残して、羽畑の姿が掻き消えた。
彼の能力は【俊敏動作】ファーストムーブ。自身の脚の筋肉を強化して目では捕えられないほどの速度で動くことを可能にする能力だ。

普通ならば光速で動くモノを回避する等不可能なのだが、彼はそれを可能にした。不意打ちが破られることを考慮して、回避行動を準備していたことによる恩恵だ。

そして白井はお得意の転移で攻撃を回避。機速の真横に転移する。
彼女の武器は何もテレポートだけではない。風紀委員としての攻撃。
ジャッジメントすなわち体術も彼女の大きな武器の一つだ。

「これを……………避けられますの？」

「なあっ!？」

白井は目にも止まらぬ速さで機速の右腕と服の襟を掴むと、背負い投げの要領で機速を地面に叩き付けた。

その衝撃で肺の空気が全て外へと排出されてしまった機速は咳き込んでしまう。

「かはっ……………けほっけほっ……………て、テメエ」

「やり返しはごめんですの」

そんなことを言いながら、白井は自身の太ももに巻いてあるベルトから大量の針を機速の服に向かって転移させる。カカカツという甲高い音を鳴らし、機速の服が地面へと縫い付けられてしまう。

これで身動きはできない。これで……隙……ができた

「翔……！ 動きは止めたの……！」

「……ちゃんと見えてる。狙いは外さない……ッ……！！！」

白井と磯速の真上からそんな返事が返ってくる。声の主は羽畑翔。どうやら自身の能力を使って上空に飛翔しているようだ。

羽畑の能力には攻撃力が無い。当たり前だ。ただ速く移動するだけの能力なのだから。

そんな羽畑の武器。それは……学園都市製の銃器鈍器のオンパレードだ。

羽畑は腰に装着していた折り畳み式の能力者捕獲用のネットが装填されているバズーカ砲を高速で組み立てると、ガコン と照準を身動きの取れない磯速へと合わせた。

「……とりあえず捕まってもらう。お前は少しばかりやりすぎた」

バン！ と、バズーカ砲から巨大なネットが磯速へと向かって発射された。照準のズレは全くなし。

これで終わった。意外とあっけなかったな と羽畑と白井は嘆息する。危険は取り除いた。これでこれ以上無駄な犠牲が増えることは無い。

しかし、現実はそう甘くはなかった。

「……んじゃねえぞ」

「……？」

「相当なめてんじゃねえぞテメエらあああああ
ああああああああああああああああああああ
あああ！！！！」

磯速が突然怒りのあまり喚き散らす。普通ならばこんなことをしたところで状況は変わらない。身動きは止めているし、照準もずれていないからだ。

しかし、磯速は『原石』^{イレギュラー}。その能力は感情の起伏に大きく左右される。説明不能な能力。それが彼ら『原石』のチカラだ。

磯速が喚き散らした直後、彼の体から先ほどよりもかなり質量が濃い光線がネットへ向かつて放たれた。

ちょうどその光線の射程上にいた羽畑は突然の出来事に体が動かず、攻撃が直撃してしまう。

体のあちこちに大きな火傷を負いながら地面へと墜落していく羽烟を、白井は自分自身を転移させてなんとかキャッチ。

「翔！！大丈夫ですよ！？」

「……悔しいが……戦闘は不可能っぽい。お前も……逃げろ」
「な、何を言ってますの！？ 磯速はわたくしが行動不能に

L

「あーあーあーあー。相当気に入ってた服だったのによお」

「なつ……」

「……やつぱりか」

自分が自信を持って完璧だと自負できるほどの拘束を軽く抜け出した。そんな磯速の姿を前に言葉を失う白井黒子。

白井はそんな磯速に恐怖を抱くと、反射的に磯速の背後に転移し

た。右手には羽畑の懐から抜き取ったサバイバルナイフを持った状態で。羽畑の静止の声も完全に無視して、白井は磯速の背中に向かってサバイバルナイフの煌めく刃を振り下ろす。

が、磯速にその刃が突き刺さることはなかった。

それは何故か。理由はとてつもなく簡単だ。なぜなら……白井がサバイバルナイフを振り下ろそうとしたまさにその時、磯速が光速で白井の背後へと回り込んだだけなのだから。

「っ！？」

「甘いなあ。相当甘えよテメエ。そんな程度の攻撃で俺が死ぬとでも？ 相当俺を軽く見すぎだよテメエ。あーあ、何か興醒めしちまったなあ。相当テメエら飽きたよ。だからよあ」

ここから逃げ出すことが得策なのに体が動かない。顔だけが背後を向いていて、体はいまだにサバイバルナイフを振り下ろそうとする体制だ。

磯速はニイイイイと裂けそうなほど口角を吊り上げ、光の刃を一瞬で練成する。大きさは白井が持っているサバイバルナイフほどしかし、その破壊力はサバイバルナイフなど到底及ばないほどだろう。

（わたくし、死んだ？）

何故か冷静に判断できてしまった。身動きもとれない。攻撃はすぐ後ろ。回避も不可能だろう。

だからこそ白井は自分自身の死を覚悟した。

そんな白井をニヤアアと見て、磯速は勢いよく光の刃を振り下ろした。

白井はこれから自分自身を襲うであろう痛みに耐えるべく体を強

張らせる。

しかし、その刃が白井に届くことは無かった。

「……………黒子は……………やらせない」

「……………え？」

その光の刃は白井に突き刺さらない代わりに、白井の大切な人の右胸を貫通していた。

呆然とする白井の目の前でゆっくりと地面に倒れていく羽畑。グシャッと大量の血をまき散らして俯せで倒れてしまう羽畑。すでに虫の息で急いで病院に運ばないと手遅れになってしまうだろう。そんな死ぬ寸前の羽畑翔は視線を白井の方へと向けると、

「……………く、ろこ……………逃げ……………ろ……………」

「か、かけるう！？　しゃ、喋ってはダメですよ！！　き、キズに響きますの！！」

「……………た……………のむ……………ここは、退いてくれ……………俺たちじゃ……………無理だ」

『無理』

その言葉が白井に深く突き刺さる。今の白井でもよく理解できる。この敵はあまりにも強すぎて、自分たち二人だけでは相手にもならないということが。自分の目の前で今にも死んでしまいそうな相棒がそれを雄弁に語っている。

白井は奥歯が砕けそうなくらいギィィィと歯ぎしりをする、

「……………了解、ですの」

そう言っ て磯速を睨みつけると、自分と羽畑をその場から転移さ

せて逃走した

その場に残された磯速来斗は穴だらけになった自分の服を一瞥すると、

「はあ……相当買いなおさないといけないってかあ？ チツ。ただでさえ貧乏なのによお」

学園都市で随一の大きさを誇る病院の一室。そこに『トラブルコンスト緊急任務解決班』のメンバーが暗い表情で集まっていた。

円を描くように集まっている彼らの中央にはベッドが一つ。磯速来斗の攻撃が何度も直撃して意識不明の重体になっている羽畑翔だ。彼の周りには人工呼吸器や点滴などの数多くの機器が所狭しに置いてある。

そんな羽畑をぼーっと見ていた麦野龍華は両手のコブシを爪が食い込んで血が出そうになるぐらい力強く握りしめると、病室の扉に向かって歩き出した。

麦野が病室を出ようとしたまさにその時、麦野の相棒である乙金来夏が静かな声で、

「復讐にでも行く気？ やめときなさい。一人で勝てるような相手じゃないわ」

「……………そんなの、やってみねえと分からねえ」

「無理ね。アンタの能力は何？ いくらLEVEL5だと言っても風よ風。風が光に勝てると思ってんの？ レベル云々の前に相性が悪いのよ。それに機速はLEVEL不明の能力者よ？ もしかしたらLEVEL5かもしれない。そんな相手にアンタ如きが勝てるの？」

「……………」

自分でも自覚していた事実を言われ、病室を出ようとしていた足を止める麦野。

確かに自分では勝てないかもしれない。だが、自分以外の人が傷つく光景をこれ以上見たくない。眠り込んでいる羽畑を心配そうに見つめている白井を見て麦野はそう思う。悲しみは更なる悲しみを生む。それならば、自分がその悲しみを断ち切りたいと思って何が悪い。それは完全に自分の身勝手だ。そんなことは分かっている。だが、自分の心が納得してくれない。

その場にただ突っ立っている麦野の背中に、パーン！ という音と共に張り手が送られた。

「……………痛い」

「はいはいテンションが低いわよー。今から決戦に行くって言つのにそんなテンションでどうすんだ？ もっとやる気出せやる気を」

「来夏……………」

「もっとアタシたちを頼ってくれてもいいじゃない。相棒」

これまで何度も一緒に任務をこなしてきた。お互いの力量もそれ

なりに知っている。だからこそ乙金は麦野に自分を頼りにして欲しかった。どんな困難でも二人で乗り越えてきた。別に恋人になりたいたとかって言っているんじゃない。一生一緒にいてほしいとか言っているんじゃない。アタシはただ……自分が惚れた相棒に頼りにして欲しかっただけなんだ。

「アタシとアンタは相棒だろ？ 一応は最強タッグとか言われてんだ。見せてやろうよ。アタシとアンタの恐ろしさをね」

「来夏……」

「ちよろつとー？ 私もいるんだけどー？」

完全に空気と化していた御坂美琴レールガンが自分の存在を主張する。

「分かってるわよ。アタシとミコツちゃんと龍華の三人で

」

第八位でありながら第四位の弟である超能力者

ジャッジメント

風紀委員の中で最強の攻撃力を誇る大能力者

レールガン

常盤台の超電磁砲と呼ばれている超能力者

この最強の三人はお互いの腕を突き出すと、闘志に満ちた瞳をお互いに確認する。

「チョーシに乗ってるバカを叩き伏せてやろうじゃないか」

「「おうっ！！」」

第3話 物理攻撃VS光の原石（後書き）

「感想、お気に入り登録など期待しているわ!!」

常盤台中学の超能力者の少女

御坂美琴

第4話 決戦開始（前書き）

「出番、最近少ないわね……」

B
y 結標淡希

第4話 決戦開始

学生たちがほとんど帰宅して静まり返っている第7学区。そこを磯速来斗はジュースを飲みながら歩いていた。500mの炭酸飲料。常に刺激を求めている彼らしい飲み物だと言えるかもしれない。磯速は学生なのだが高校は入学した直後から通っていない。勉強なんかに興味はなく人付き合いも苦手な彼としてはしょうがないことなのかもしれない。人間は自分の苦手なことは避けようとする生き物なのだから。

（今日は3人撃破か……相当ペースが落ちてきてんなあ……こんなチョーシじゃ相当何年要るのか分かったもんじゃねえ）

強敵ぞろいの風紀委員を一日に3人撃破するということをペースジャッジメントが悪いと言ってしまう彼の言葉から、彼自身の強さが見て取れる。元々、磯速は強すぎるあまりに孤独になってしまった人間だ。それも学園都市の治安を守るために存在している風紀委員ジャッジメントが原因で。明日はペースを上げますかねーと言いながら磯速が空になったペットボトルをくずかごに投げ入れようとしたところで、声をかけられた。

「ちよつとちよつとー？　ちゃあんと分別してくれなきゃ困るんですけどー。あ、それともジョーシキも分かんないくらいバ力なのかな？　そりゃそうか！！　高校サボってるもんなアンター！！」

漆黒に染まった空に溶けいるような黒髪をポニーテールにまとめた巨乳の少女が自分の前に立ち塞がった途端に罵倒の嵐を浴びてきた。こんな状況に立たされたら誰だってイライラするに決まってる

いる。

案の定、磯速は自分の周りに光をもれさせながら巨乳の少女

乙金来夏の方をギリッと睨みつける。

「何だデメエ。最近は出会いがしらに罵倒すんのが相当流行ってんのかぁ？ クソ風紀委員さんよお」

「流行ってるわけじゃねえわよ。ただ駄々っ子のように暴力振り回して暴れまわっているクソガキにしつけするときに使う最高の褒め言葉と思ってくれば光栄だわ」

乙金の言葉に磯速の目つきがスーッと細くなる。そんな磯速を見て乙金が鼻を鳴らした。

刹那

磯速が信じられないようなスピードで乙金に突撃した。

「その緑の腕章相当引きちぎってピアスとして顔にブツ刺してやるよおおおおお！！！」

まさに光速と言わんばかりの速度で乙金の左の二の腕についている風紀委員の腕章に手を伸ばす。二の腕に迫る五本の指がフォークの様に腕章を捉えようとしていた。

しかし、その攻撃は乙金どころか腕章に届くことは無かった。

「がつ……ッ！？」

なぜなら、磯速の右の方から自動販売機が勢いよく飛んできて、磯速の体にぶち当たったからだ。

「オイお前。男女平等上等って考えでも持ってたのか？ 止めとけよその考え。この街の女は怖いぞ？ ケロッとした顔でビーム打ってくる姉や冷たい笑顔で人を地面に埋めちまうガールフレンドとかいろいろいるからなあ。自分がケガする前に気づけー」

五メートルほど飛ばされた機速は地面に血を吐いて立ち上がる。とつさに防御態勢を取ったようで大きなケガは見当たらない。さっきよりも戦闘意欲が掻き立てられたという感じだ。

先ほど自動販売機が飛んできた方向からなんとダウナーな調子の声がとんできた。ザッ ザッ と、一歩一歩地面を踏みしめてやってくる声の主の顔は男なのか女なのかよく分からない。女よりの顔なのだろうが服装や歩き方がどう見ても男なのだから仕方がない。

「デメエも平気そうな顔で相当ぶっ飛んだことしてくれてんじゃないか……」

「まあ今のは今までやられてきた俺たちの仲間の怒りだと思って水に流せよ。お前はそれぐらいのことをしてきてるわけだからなー」
「ケッ。こつちもこつちで相当気が立ってんだっての。複雑骨折程度じゃ済まさねえぞデメエら」

漆黒に染まった学園都市に異端な輝きの光が現れる。それは機速の体から後光のように辺り一面に放射されている光だ。自分の感情がそのまま能力に反映される『原石』の特徴の一つだ。

しかし、女か男か分からない少年 ジャッジメント 麦野龍華は風紀委員の象徴である緑の腕章をカッターシャツの左肩の部分につけると、飄々とした調子で話し出した。

「自分の長所とか強みとかを人に話すのは嫌いなんだけどさー、来夏が早く終わらせたいみたいだから言わせてもらっわ」

来夏って言うのかアイツ と、磯速はこれからぶち殺すであろう人物の名前を頭に叩き込む。

「俺さ、一応はLEVEL5やってんだよ。序列は八位。【風勢制御】^{ユイブ}って言ったら分かるか？」

「第八位…… ああ、あの【原子崩し】^{メルトダウン}の実際の弟とかっていう相当チヨシくれてる最弱のLEVEL5か」

クケケ と磯速の口から思わず笑いが零れる。無能力者として登録されている自分が目の前の超能力者を倒すことができたらどこまでの快感に包まれるだろうかという考えに高揚しているのだ。

そんな磯速の冷たい言葉に麦野は思わず手を出そうとしたが、乙金に片手で制される。

「止めとけ。一人じゃ勝てねえから三人で来たんでしょ？ もう少し冷静になりなさい」

「…了解」

「おーおーおー、第四位の弟ともあろうヤツが女一人に片手で止められてるときだ。テメエ、相当弱いんじゃないの？ ギャハハッ、そりゃあ相当面白いなあオイ。オレの最強伝説に相当さらに拍車をかけてくれるってのかあ？」

自分の強さがどこまでいけるのかを知りたい。風紀委員を何回も何百回も撃破していく内、磯速にはそんな感情が芽生え始めていた。認められないのなら認めさせてやればいい。孤独でしかいられないのなら孤独を突き通せばいい。何も周りに合わせる必要はない。自分が自分であり続ける。そのためなら他人がいくら苦しもうが知ったことじゃない。

「オイ、磯速来斗」

その時、麦野を制していた乙金が漆黒のグローブを装着しながら冷たく静かな声で話し始めた。

「ああ？」

「アンタがどれだけ強いのかは知らないけどさあ、アタシんこの仲間あバカにするのだけは許さねえぞ？　今回は事情が事情だから助っ人も用意してるし、アンタっていうカエルに大海を思い知らせるいいチャンスなのよ」

「助っ人だあ？　そんなのオレには相当関係ねえけど。だってどうせオレが勝つんだからよあ」

「ハッ。言ってくれるねえ三下。こりゃ本当に井の中の蛙なのかな？　どこまでいたぶれば分かってくれるんだろうなあ今の自分の状況ってヤツをさあ」

指の関節をパキパキ鳴らしながら乙金は言う。磯速はニイイと口が裂けそうなぐらいの笑みを浮かべ、両手に光の剣を生成する。長さは日本刀ほど。大きさは鉈ぐらいあるだろうか。とにかく光の粒子で構成された非現実的な凶器が磯速の両手に握られている。

「随分とメルヘンチックな武器を持つてんな。どこぞの第二位に見せてやりてえよ」

「垣根の方が凄いやない。何て立って羽根生やせるのよ羽根。あれはもはや天使だわ」

「せめて翼って言ってやれよ……」

どんな威力化も検討が付かない武器を目の前にしても尚、麦野と乙金はシリ阿斯に会わないほのぼのとした会話を始める。

そして、ついに人一倍キレイやすい磯速の堪忍袋の緒がプツンと切

れた。

「その減らず口い、コレで二度と開けねえぐらいに相当縫い付けて
やんよおおおおおお！！！！」

ビュン！！ と、風切り音を鳴らしながら二本の光の剣がそれぞれ
麦野と乙金に向かって飛来していく。光の粒子でできている剣は
光速とまではいかないまでも、凄まじい速度で突っ込んで行っ
てい。常人ならば避けることも不可能だろう。常人ならば。

「あらよつと」

「あつぶないわね」

実力、能力ともに常人ではない二人は二・三回のステップだけで
光の剣をひらりと回避する。磯速は顔を驚愕に染めながらも次々と
同じような剣を生成しては麦野と乙金の方へと投げていく。

しかし、攻撃は二人には当たらない。頭に血が上っている者と冷
静に対処している者の小さな差が行動に大きな差をもたらしている。
戦いに必要なのは冷静な判断力。それを早々に失ってしまった磯速
の攻撃が当たらないのも、そう考えれば頷ける。

「なあ磯速、さっき来夏が言ったことをもう忘れたのか？」

「あゝあ！？」

不良のようながらの悪い返事を磯速は返し、麦野は磯速の背後を
指差す。

「直撃残念また来週」

「は？ テメエいったい何言っ

直後、

機速の体が分厚い超電磁砲レールガンの直撃を受けて宙を舞った。

第4話 決戦開始（後書き）

「あのう、俺は一応原作の主人公なんですけど……出番少くないか？」

B y 上条当麻

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4605z/>

とある科学の風勢制御《ブラストマニューブ》

2012年1月14日19時54分発行